

再臨のキリストによる 第1福音書

テロス第1

—キリスト教の完成と
終末について—

II

THE GOSPEL

BY CHRIST OF

THE SECOND COMING No. 1

TELOS No.1

SEIDOU

正道

目次

テロス第1	
第1福音書	2
全体の目次	3
第2章 グノーシス主義という「↑」	
(1) キリスト教の「↓」に対する補償	6
(2) 西洋に現れた仏教的思想	8
(3) マニ教とアウグスティヌス	13
第3章 錬金術という「↑」	
(1) 疵なき「↑」の思想	20
(2) 錬金術の栄光と凋落	23
(3) 時代から取り残される	26
(4) 錬金術から科学へ	28
第4章 パラクレートという「↑」	
(1) 聖霊からの助力	34
(2) パラクレートと教会	38
第5章 ユングという「↑」	
(1) 科学から芽吹いた「↑」	42
(2) ユングの「↑」研究	46
第6章 ユングという「洗礼者」	
(1) 思想的バプテスマ	52
(2) ヨブへの答え	54
(3) 神の人間化	59
(4) 洗礼者としての限界	62
第7章 七つの巻物	
(1) 現代に引き継がれるテロス	66
(2) 黙示録が示すもの	68

テロス第1

第1福音書

再臨のキリストによる

第1福音書

テロス第1

——キリスト教の完成と終末について

第3部 キリストの完成と終末について

われわれ西洋人の無意識に対する恐れがどんなに大きいか、そしてそれに対する抵抗がどんなに激しいものであるか、ということを見出すであろう。この抵抗のために、われわれ西洋は、東洋にとっては明白と思われる当のもの、すなわち内向的な心のもつ自己救済の能力を疑っているのである。

ユング『東洋的瞑想の心理学』

湯浅泰雄・黒木幹夫訳より

全体の目次

テロス第1

キリスト教の完成と終末について

第一部

宗教の完成と終末について

第二部

仏教の完成と終末について

第1章

「↑」の典型的宗教

第2章

「↓」という補償を受けた仏教

第3章

「仏教の完成」への接近

第4章

親鸞の「悪人正機説」

第5章

仏教の完成と終末

第三部

キリスト教の完成と終末について

第1章

教会による「↓」の徹底

第2章

グノーシス主義という「↑」

第3章

錬金術という「↑」

第4章

パラクレートという「↑」

第5章

ユングという「↑」

第6章

ユングという「洗礼者」

第7章

七つの巻物

第2章 グノーシス主義という「↑」

(1) キリスト教の「↓」に対する補償

キリスト教史の要約

第1章で見てきたように、キリスト教は、その長い教会史のなかで「↓」の宗教スタイルを、ほとんど極限まで徹底させていった。

むろん私たちは、ざっと素描的にキリスト教史を概観したに過ぎない。しかし、それでも、そのキリスト教会史という道路が、「↓」方向へ、いかに偏向的に舗装されていたかは、十分に伝わったものと思う。

そこに描かれていたことを要約すれば——まず教会は、イエスの受肉（奇跡）を、歴史的に一回かぎりの事であると強調した。

この処置をすることにより、教会もまた、イエスの正統後継者として、歴史的に、唯一絶対的な存在となることが出来た。

そして、そのように「唯一にして絶対」となったため、カトリック教会は、以後、宗教的な“競争相手”を持たずに済んだのである。

そして、競争や競合のないところには、怠惰と墮落、そして腐敗が生じるというのが、きわめて普遍的な「世の道理」である。

かくして大いに腐敗したカトリックは、その狭量な心性をもって、ことごとく「↑」のベクトルの芽を潰していった。

すなわち、「↑」の要素を見つければ、すぐさまこれを「異端思想」と呼んで断罪したのだった。それを無慈悲なまでに殲滅するか、あるいは徹底的に排斥したということである。

これに対する表面的な理由はいくらでもあろう。だが、最終的には、自分たちのライバルとなる「第二のキリスト」を生まないために、彼らはそれをしたのである。

「↓」の完全純化

結果、カトリックが近代までに遺した宗教理念は、そのほとんどが「↓」的なものとなった。悟りのよすがなどは、薬にしたくてもない有様だった。

しかも、頼みの綱であるプロテスタントまでが、カトリックの背中を、後押ししてしまったのである。

こと「キリスト教圏における『↓』の徹底」という偏向に関しては、ほとんど積極的なまでに。皮肉なまでに。カトリックに対する「反抗」として登場したのが、プロテスタントであったはずなのに。

むしろ「↓」の決定打を打ったのは、彼らプロテスタントだったかもしれない。そして、その象徴的成果こそが、プロテスタントを代表するルターが書いた、かの『奴隷意志論』であったのだ。

だがそればかりではない。対抗宗教改革の際に、事態はさらなる偏向を加えられることになる。この対抗宗教改革とは、プロテスタントの反抗を受けて傷ついた、カトリックの自己修復のようなものである。

このときカトリックは、プロテスタントの徹底的な「↓」の姿勢を、その徹底的なままで、自己の教理に取り入れた。同じキリスト教徒として、プロテスタントの考えを「それを正統なものだと認めないわけにはいかない」と言って。

この時をもって「キリスト教圏における、『↓』の完全純化」は成就されたと言える。つまり、カトリックもプロテスタントも、最後には手と手を携えて、まったく純粋な「↓」スタイルの宗教へと辿り着いたのだった。

「＝」の働き

キリスト教は、本当にもう、行き着くところまで行ってしまった——私の口からは、思わず、そんな嘆息まじりの言葉が出てしまう。

しかしながら「＝」というエンテレケイア（完成理念形）は、仏教のときと同様、たしかにキリスト教にも、働きかけていたのである。

すなわち「＝」は、何度も何度も「↑」のベクトルを、西欧のキリスト教世界に投げかけていたのである。キリスト教の偏向した「↓」が、なるべく自分の姿（＝）に近づくようにするために。その「補償による宗教の完成」の成就を心から願って。

むろん、この補償作用を、実際に教会が受容したかどうかは、また別の話となる。いや、教会がそれを受容しなかったことは、すでに明らかではあろう。けれども「↑」による補償は、たしかに西欧世界に、断続的に与えられてはいたのだ。

ここからの数章（第2～5章）では、この「↑」の補償が、歴史的な現実のなかで、どのような具体像を持ったかについて詳らかにしたいと思う。

（２）西洋に現れた仏教的思想

グノーシス＝靈的認識

「↑」による補償の第一の波が、グノーシス主義である。

グノーシスとは、靈的な認識のことであり、分かりやすく言えば「悟り」のことである。

その意味で、歴史的な枠を外せば、仏教はまさしくグノーシス主義に他ならない。逆に言えば、いわゆるグノーシス主義は、西洋に現れた仏教的思想ということにもなるだろう。

キリスト教の原始共同体が生まれた頃、グノーシス主義者たちは、プラトンやイエスの教えを再構成して、独自の「悟りの神話」を生みだしていった。

——一般的なグノーシス〔主義〕の場合、創造神／宇宙／世界は暗闇〔に属しており〕、人間も大部分が暗闇〔に属していると考える。〕

ただし人間の内部の核心部分——「霊」「魂」「火花」「本来的自己」その他、呼び方はさまざま——だけが光り輝いており、この輝きは宇宙を超越したプレーローマ世界（＝至高神の世界）の輝きと同質である。

この「光の粒子」が、自らの本質を「認識」（グノーシス）した上で、闇の世界を脱出してプレーローマ／至高神のもとに帰還すること、それが人間の救済である——

筒井賢治『グノーシス・古代キリスト教の〈異端思想〉』より

このようなグノーシス主義者たちの神話は、宗派によって、かなりそのディティール（細部）が異なっている。

その違いに対する興味は尽きないが、この場でそれを紹介するのは明らかに無理がある。かかる異説の数が、あまりにも多すぎるからだ。

それらを羅列していったら、とてもではないが本書は「キリスト教の完成と終末」という主題に、戻ることが出来なくなるだろう。

自己肯定的な思想

だいたいどの宗派で共通しているのは「この世は汚辱の世界だが、人間の心の奥底には、神性の欠片が潜んでいる。その欠片をグノーシス（靈的認識）によって拡張、覚醒させれば、人間は、神の世界に帰ることが出来る」ということである。

神性の欠片は「人間内部の神的な本質」「種」「本来的自己」「火花」「真珠」などと呼ばれている。それが人間の心の奥底に隠されているという。

これは疑いようもなく、仏教の如来蔵思想と同じものだ。如来蔵思想とは「すべての人間は、如来（仏性）を胎児として心に宿している」という考え方だからである。

そしてこれは「人間が、本質的には、神と同じものを持っている」という点で、非常に自己肯定的な思想であると言えよう。なにしろ自分自身を“本来的には”大変優れたものの（＝神）であると信じて疑わないのであるから。

それだけにこれは、キリスト教の正統派における人間観とは、全くの正反対になっている。かかる正統派では、人間を根本から「神の恵みに拠らなければ肯定されない存在」「悪く、無力なだけの存在」として断定するのだからだ。

この点において、グノーシス主義者たちの主張は、本当にすばらしいものだと思う。たとえ欠片ほどであっても、胎児的であっても、彼らは「人間の本性は神に似ている」とまで言っているのだから。それは極めて大胆で、極めて明朗な主張である。

しかも仮に、グノーシス主義者たちの主張どおりであるとすればだ。ひとつの可能性として、人間の認識は、もしかしたら、神の次元にまで上昇するかもしれない。似たものの同士は、得てして互いに引き合うものだからだ。

グノーシス主義者たちの主張に拠れば、そのように考えても、全く不都合がないことになる。とすると、ここには、とてつもなく力強い「↑」が表現されている、と、そのように言えるのではないだろうか。

二柱の神を設定する

ただし、このグノーシス主義の思想には、かなり大きな疵もある。

まず話の前提として、彼らグノーシス主義者たちは、この世界（現世）を汚辱の世界だと認識していた。これもまた、現世を苦界とする「仏教」と共通している感覚である。

しかしグノーシス主義の場合は、その汚れている理由が問題なのである。すなわちグノーシス主義者たちは、

「この世は邪神が創造したものだから、生まれた初めから汚辱に満ちているのだ」

と考えたのである。つまり彼らは、旧約聖書の創造神を邪神と考えているのだ。

ところが、その一方で、グノーシス主義者たちは、「イエスは“善き神”の子である」と規定する。普通に聖書を読めば、イエスが父と呼んだ神とは、旧約の神——この現世を創った創造主になるのにも関わらず。

ここにグノーシス主義の、問題山積のオリジナリティーがある。

とどのつまり、グノーシス主義者たちは、二柱の神を設定したのである。

一柱は、至高神であるプロパトール。こちらが、イエスが「父」と呼んだ神である。

そして、もう一柱が「プロパトールによって創られていながら、かかる自分の出生の系譜を知ることがない」「しかも、その狭い世界観ゆえに、自分を至高の存在であると思い込んでいる」「そうした低次の神であるところの」創造神デミウルゴスである。

そして、このデミウルゴスこそが——グノーシス主義者によれば——旧約聖書におけ

る創造神に他ならないのだ。

小馬鹿扱いされる創造神

グノーシス神話の設定上、デミウルゴスは、本当のところ、至高神プロパトールの、創造物の創造物の創造物の創造物ぐらいの神である。言うなれば、神なるものの切れ端といったところか。

けれども、視野が狭いデミウルゴスは、こういった「神々の系譜」を全く理解していない。まずもって自分のことだけしか分からない。それで自分のことを、独立した、孤高の創造神だと思っているのである。

その身の程を知らぬ姿たるや、一糸まとわずに偉ぶっている、裸の王様そのものと言えよう。

グノーシス主義者たちは、こうした設定のもとにあるデミウルゴスを、かなり小馬鹿扱いしている。

——その〔デミウルゴスと呼ばれる〕獣は目を開いた。彼は大きい無窮の物質を見た。そして高慢になって、言った、
「私こそが神である。私の他には何者も存在しない」と。

彼はこう言った時に〔その無知ゆえに〕、万物に対して罪を犯したのである。

さて、権威の高みから〔プロパトールのものと思われる〕ある声が到来して、こう告げた、「お前は誤っている、サマエールよ」と。——「サマエール」とはすなわち、盲目の神という意味である——

『アルコーンの本質』からの引用 大貫隆訳著『グノーシスの神話』より

繰り返すが、デミウルゴスは、具体的に言えば、旧約聖書の創造主のことである。

ヤハウェとも呼ばれるこの神は、聖書の中で何度も、上記のデミウルゴスと同様に、「私だけが神である。私の他に、いかなる神も崇めてはならない」と言っている。先の文章からすれば、グノーシス主義者たちにとって、この言葉は、ヤハウェが盲目の神であることを自白している証拠に等しい。

ゆえにグノーシス主義者たちは、この世界は、盲目の邪神が創った“欠陥品”であると結論づける。そのような欠陥品だからこそ、この世は汚辱に溢れているのだ、と。

相補的な真理

しかし、私はこのような考えを取らない。新約、旧約をとおして、神は一つである。

譬えて言うなら、私は「イエスの父」と「旧約のヤハウェ」は、一なる神の肢体の、いわば「胸にあたる部分」と「臍にあたる部分」を指し示しているに過ぎない、と考えて

いるのである。

かりに神の肢体を「人体」として想像すれば、当然、胸の位置と、臍の位置では、その高さが違っている。また、その性質も違っている。

まず胸であるが、母親の胸からは、愛児が吸うための甘く豊かな乳が湧出する。それは優しさ、柔らかさを印象づける部位である。

他方、骨で囲まれていない臍まわりには、その引きしまったウエストを保つため「筋トレを続ける強い意志」が不可欠となる。妥協と惰性は、ウエストを醜く、たるませるばかりだからだ。

よって臍まわりは、それを“教え”に焼き直すとしたら、どうしても厳しい印象を与えざるを得ない部位となろう。

つまり、一人の人間の同一肢体の中にあつたとしても、その該当部位によっては、印象や、求められるものがガラリと変わってくるのである。

これは単なる比喻ではない。

「神の救いに与るには、汝らは、子供のごとくあらねばならない」と説くイエスの教えは、霊的な母性愛そのものである。

そして、旧約のヤハウェ神が突きつける「戒め」を守るためには、きわめて父性的な「強い意志」が必要になる。

あくまでも一柱である神は、これらの「部位によって異なる教え」を説くために、イエスとモーセを必要とした。あるいは、新約の時代と、旧約の時代を必要としたのである。

だから私は、それを二柱の神のごとく、別々の名前で呼ぶことは、断じて否定せざるを得ない。それは単に、要りもしない混乱を引き起こすばかりだからだ。そしてグノーシス主義者は、まさに、そのような神学的混乱を生みだしたのだった。

教会が受容すべきだった「↑」

上述したような「思想的疵」を考慮するため、私自身はどうしても、グノーシス主義を、手放して評価する者にはなれない。

この点では、旧約聖書をも、自分たちの正典に含めたキリスト教会も同じだった。

彼らもまた、グノーシス主義者たちを「異端」と呼ばない訳にはいかなかったのだ。二柱の神などという“汚点”を設定してしまった、グノーシス主義者たちであつては。

そのような教会側の心情については、私にも容易に理解することができる。

しかし、それでも私が言いたいのは、
「グノーシス主義には、間違いなく、色濃い『↑』の要素が含まれていた」ということである。そこには確かに、キリスト教の「↓」を補償するものがあつたのだ。

実際、近年では「グノーシス主義的な内容の福音書」なども続々と発見されている。その中でも、次に掲げる『真理の福音』の一節などは、まさしくキリスト教会が受容すべき、典型的な「↑」の思想だったのでなかろうか。

——もし彼が呼ばれるなら、彼は聞き、彼を呼んでいる者（＝神）へと向きを変え、

彼のもとに昇って行く。そして、彼はどのようにして自分が呼ばれたかを知る。認識を得て、彼は自分と呼んだ者の意志を行い、彼の意に添うことを欲し、安息を受ける。

一人一人の名がその人に帰される。このように認識するであろう者は、自分がどこから来て、どこへ行くのかを知る。彼は、酔いしれていて〔まどろみの中にあったが、そのとき〕、酔いから醒めた者のように、自己を知るのである――

大貫隆訳著『グノーシスの神話』より

学ぶべき相手を敵と呼ぶ

しかし三世紀頃、教会が「正典（新約聖書）に、どんな文章を含めるか」を決めた段階で、こうしたグノーシス主義的な文書は、すべて除外されてしまった。

ということは、その頃には、教会側にとって、グノーシス主義者たちは、もはや完全に「忌まわしい敵」になっていたということだ。とてもではないが、彼らから、何かを学べるような空気ではなくなってしまっていた。

その憎悪感情の一例として、『ヨハネの黙示録』の一節を掲げておこう。

グノーシス主義者たちの一部は、キリスト教徒から「ニコライ派」と呼ばれていた。ちょうど『黙示録』を書いた、ヨハネが生きていたころの話である。

そのニコライ派に関して、ヨハネは次のように、朋友たちに書き送っている。「〔キリスト教会である〕あなたのところにもニコライ派の教えを奉ずるものたちがいる。だから悔い改めよ。さもなければ、すぐにあなたのところへ行って、わたしの口と剣でその者どもと戦おう」

これはもう、一見して明らかなケンカ腰であり、あからさまな対決姿勢であろう。そして、ケンカの相手から何かを学ぶということは――よほどの人格者でなきかぎり――あり得ないだろう。

(3) マニ教とアウグスティヌス

グノーシス主義の昇華、マニ教

グノーシス主義は、その教義内容を大幅に取り込まれた形で「マニ教」に引き継がれることになる。三世紀から七世紀のことだ。このときマニ教は驚くべき拡大をみせて、一気に世界宗教化する。なにしろ我らが日本にも、マニ教の遺品が残っていたというのだから、その伝播力の強さには頭が下がる。

これほどの勢力を持ちえたのは、マニ教が「↑」と「↓」の双方を備えた、宗教的に「極めて完成度の高い教え」だったからだと思われる。

というのも、「↑」的なグノーシス主義を取り込んだといっても、マニ教の中には、キリスト教の「↓」的要素が、かなり色濃く既存していたからだ。むしろ教祖マニとしては、「自分は真実のキリスト教を説いているだけだ」

という意識すらあったようである。

それだけに、純正なるキリスト教会の側では、マニ教と自分たちとの違いを、ことさら強調して宣伝しなければならなかった。

何分これら二つの“新興宗教”を擁するローマの人々には、キリスト教もマニ教も、ほとんど同じものに見えたらしいからだ。

そのようにキリスト教会は、競争相手との“相違性”を強調した。

だが一方のマニ教は、こうしたキリスト教徒たちによる差別化を、逆に嘲笑っていたのではないか。そうして自分たちの教説を、キリスト教を進化、完成させた「究極の教え」だと思っていたに違いない。

完成された宗教の宿命

そして事実、その完成度の高さによって、マニ教は、瞬時のきらめきのように、あっという間に、世界中に拡散していった。

しかし、完成しているものはなにも発展させない。とくにそれは「歴史」という名の時間的変化を生みださない。完成（テロス）までの過程こそが歴史ならば、初めから完成しているものに、歴史など縁はないのである。

そのためだろう。マニ教は長い歴史を持つことなく、その拡散と同じようなスピードで衰退してしまった。今では、中国の奥地（福建省）にある村を除いて、マニ教徒は、完全に消え去ってしまった。

表面上は、その極度のシンクレティズム（折衷主義）によって、教えの内容が複雑になり過ぎたことが、衰退の原因とされる。しかし結局のところ、はじめから完成されていたマニ教は、もともと「歴史を生みだす根拠」を持っていなかったのである。

キリスト教に迫害されたマニ教

ここでは話を、西洋世界に限定しよう。

先述したように、マニ教とキリスト教は、かのローマにおいて「同じようなもの」と見なされていた。

そしてどちらも、一緒くたに、ディオクレティアヌス帝によって、過酷な迫害を受けた。紀元 303 年頃以降のことである。

しかし、幾多の迫害を乗り越えて、キリスト教のほうは、ついにローマの国教にまで登りつめた（392 年）。

すると今度は、そのキリスト教によって、マニ教が迫害されることになる。

そして、この殲滅的な弾圧によって、事実上、西洋世界からはマニ教が消えることになった。迫害された者たちの中には、棄教させられ、キリスト教会に取り込まれたマニ教徒も多かったようだ。

それはまた、西洋世界における、グノーシス主義の終焉の時でもあった。

マニ教は、これ以後「東洋の宗教」となる。そして、その東洋（中央アジア、東アジア）において、先述したような、短いきらめきのような伝播記録を残すことになる。

教父アウグスティヌス

ところで、ディオクレティアヌス帝による迫害時期と、キリスト教のローマ国教化の、その中間の時代——ある人物が、マニ教とキリスト教との「融合と離反」を、その身をもって体現してくれている。

それこそ、キリスト教最大の教父と呼ばれる、聖アウグスティヌス（354～430）である。教父とは、古代のキリスト教著述家のうち、正統信仰の側に立った人たちのことだ。

そんなアウグスティヌスが「教父として」語ったのは、もちろん「↓」の教えだった。著作で言えば、有名な『神の国』が、これに当たるだろう。

キリスト教の正統信仰に拠って立つ限り、その教えが「↓」にならないはずがない。

あまつさえ、かの「事効」を最初に提唱したのも、他ならぬアウグスティヌスであった。事効とは、第1章において「キリスト教会における『↓』が徹底されたことの象徴」として掲げた思想である。

アウグスティヌスに内在する「↑」

しかし、アウグスティヌスを「最大の教父」と贈り名されるほどの偉人にしたのは、むしろマニ教が持っていた「↑」の要素だったのではあるまいか。

というのもアウグスティヌスは、青年時代にマニ教徒となり、壮年にいたってキリスト教に入信した「改宗者」だったからである。

つまり彼は、その「精神的成長の時期」に、目一杯マニ教の「↑」を吸い込んでいたことになるのだ。

たしかに壮年期以降のアウグスティヌスは、一転して、キリスト教徒として、マニ教を論駁している。

彼の『マニ教駁論』という著作は、その信念によって、多くのマニ教徒を、キリスト教徒に変えてしまったほどだった。アウグスティヌスの『マニ教駁論』は、それぐらい、論理的威力がある本だった訳である。

しかし、そんな論客アウグスティヌスを作ったのは、皮肉にも、論駁の被害者である、当のマニ教であったのだ。私には事態がそのように見える。

つまりマニ教に含まれている「↑」が、アウグスティヌスにとっての「悟りのよすが」となったということだ。

そして、その「↑」によって霊的認識（グノーシス）を得た“偉大なアウグスティヌス”こそが、マニ教にとっては仇敵にあたる「キリスト教最大の教父」となったのである。

『告白』に内在する「↑」

そのように——ある意味で、自分の恩人である——マニ教を論難し、西洋世界におけるマニ教の撲滅に寄与したのが、アウグスティヌスであった。

しかし他方、彼は自伝作品である『告白』のなかで、ごく正直に、自分が「青年時代にマニ教に影響されていたこと」を、回想して語っている。

このあたりが「教父アウグスティヌス」の、何とも不可思議なところだ。それによって彼は、結果的に——キリスト教圏に、まるで隠し子のように——「↑」の要素を、刻み遺したのだからである。

果たしてこれは、彼が望んだことだったのだろうか。

それはともかく、私は、アウグスティヌスが正統信仰の立場で書いた主著『神の国』も、上記の自伝作品『告白』も実際に読んでいる。

その上で言うのだが、私にとっては、『神の国』よりも『告白』のほうが、よほど心の深いところまで響いてくる。こちらのほうが数段上の名著だと思う。それはきっと『告白』のなかに、成長物語にとって不可欠な「↑」の要素が込められているからなのだろう。

そのように考えると、結局は撲滅されたとしても「西洋におけるマニの宗教活動も、決して無駄ではなかったのかもしれない」と思えてくる。

というのも、しばらく後には、いわゆる「アウグスティヌス主義」は、西洋世界に「↑」的な異端が生まれる温床ともなったからである。

いや、もちろんキリスト教への影響という点では、正統信仰的な『神の国』のほうが、

はるかに大きな遺産となったのだけれども。

修道院という「↑」

アウグスティヌスの場合、“人効的な”人格形成のために必須な「↑」の提供元が、かのマニ教だった。つまり、マニ教とキリスト教の両相互作用によって、アウグスティヌスは真理を悟った、ということだ。

そうってから彼は、真理体得者として、「偉大な教父」という立場に就いた。そうして「事効」の教義確立と「マニ教撲滅」を推進したのである。当然そのどちらもが「↓」に特化した影響力を持っていた。

こうしたアウグスティヌスの「功績」もあったればこそ、マニ教は、キリスト教によって西洋世界から一掃された。

このため中世（＝アウグスティヌス以降）のキリスト教徒には、ほとんど悟りの縁がなかった、と言っても過言ではない。つまり中世人には「↑」の提供元がなかった。偉大な先人アウグスティヌスが、それをクリスチャンから奪ったからである。

そんな憐れむべき「中世のキリスト教徒」に与えられた“せめてもの”悟りの縁が「修道院」だった。

修道院においては「服従」「清貧」「童貞」といった戒律のもとに、禁欲的な生活が課せられる。

この“禁欲”に、グノーシス主義者やマニ教徒との共通点がある。彼らもまた、徹底した禁欲的生活を送ったからである。そして禁欲的生活には、たしかに人の精神を「↑」の方向に押し上げる力がある。

自己肯定できない中での「↑」

とはいえ、そこに「神につながる自己肯定」の教義が欠けているならば、その「↑」の効能は、きわめて希薄なものにしない。つまり、自己信頼から生まれてくる、湧き上がるような活力に不足してしまうのだ。

実際——胎児的、潜在的であったとしても——グノーシス主義者のように「人間の自己本質は神的なものである」と教えられていればである。その人はきっと、自然に「神に届くほどの」自己成長をも想定できるだろう。

そして、そんな自己信頼感があれば、心の奥から、霊的な活力だって湧いてくるに違いない。

しかし修道院には、どこを探しても、そこまでの「↑」的な教えは存在しない。結局はパウロや、アウグスティヌスが説いた人間のイメージ、すなわち、

「神からの恩寵なくば、まったく自己を肯定できない『矮小なる存在』こそが人間である」というのが、キリスト教修道院における「基盤的人間像」だったからである。

このような自己イメージしか持っていないのでは、せっかくの禁欲生活を送ったとこ

ろで、その修行の成果は、大したものにはならない。

つまりそこでは、注目に値するほどの「↑」的上昇力は発生しない。だから修道院での「↑」は、どこまでいっても「せめてのもの」ぐらいにしかならないのだ。

たしかに修道院の歴史は、その中から、トマス・アキナス（中世最大の神学者）や、マルティン・ルター（宗教改革者）などの偉人を輩出した。

しかし彼らは、単なる修道士というよりは、修道士プラス・アルファの人生を送ることによって、偉大になった者たちではないだろうか。

ルターには、古代ユダヤ教（律法的禁欲）への傾倒が見られる。

そしてトマス・アキナスの場合には、その師、アルベルトゥス・マグヌスが、錬金術師としても有名な人物だったのだ。つまり錬金術という「↑」的な教えを奉じた人が、トマス・アキナスの先生だったのである。

私たちは次の章において、この錬金術を詳しく見ていくことになる。

第3章 錬金術という「↑」

(1) 疵なき「↑」の思想

引き継がれた「↑」

西洋におけるグノーシス主義は、マニ教もろとも滅びた。しかし、その滅びる前に、幸いにも、精神的子孫をこしらえてくれていた。それが錬金術である。

——異端たるグノーシス派は、根絶されて歴史の表面からはその姿を消したのにもかかわらず、自分でもそれと気付かぬ形で——つまり錬金術という隠れ蓑の下で、全中世を通じて生きつづけたのです——

ユング『人間心理と宗教』濱川祥枝訳より

この錬金術は、グノーシス主義の影響を受けてエジプトで形成された。開祖にあたるのは「三倍も偉大なるヘルメス」を意味する、ヘルメス・トリスメギストスである。

ヘルメスはギリシア神話における通信の神であり、プシュコポンポス（死者の魂の導き手）でもある。名前からすれば、ヘルメス・トリスメギストスは、そのヘルメスの三倍ほども偉大な神ということになる。

それほどにも偉大な神が、エジプトに実在したのかどうかは分からない。

だが、その名を使って活動していた宗教家は、確かにいたのだろう。伝ヘルメス・トリスメギストス作とされる『エメラルド板』という文献は、錬金術の根本経典にまでなっている。

私の目から見ても、そこには確かに、神的な叡智が、目一杯に詰まっているように思われる。

そのように錬金術は、まず古代エジプトで最初の隆盛を見せた。しかし、このエジプトまでキリスト教の布教が進むと、それを逃れるようにして、錬金術はアラビアへと拠点を移すことになる。そして、そこで独自の発展を遂げていったのだった。

それが十字軍などの東西交流（交戦）によって、今度はヨーロッパに流入することになる。そうして、ここに「西洋錬金術」という、独自の精神文化を創り出すことになった。

この西洋錬金術（以下では、単に錬金術と表記する）こそが、キリスト教の「↓」に対する、「↑」の補償である。

しかも、それは「↑」による補償のなかでも「グノーシス主義と並ぶ最重要事例」と言うことが出来るだろう。

グノーシス主義以上の完成度

いや、グノーシス主義と「並ぶ」という表現は正確ではない。宗教思想としての完成度からすれば、錬金術はグノーシス主義をも凌駕している。

なぜなら錬金術には、グノーシス主義が持っていたような、思想的な疵がないからだ。反現世的二元論、つまり「二柱の神を設定してしまう」といったような思想的疵がない。

グノーシス主義においては、神はデミウルゴス（創造神）とプロパトール（至高神）に分裂してしまった。けれども錬金術には、そのような混乱がないのである。

じっさい私には、錬金術が、疵のない宝珠のような宗教的思想に見える。

二柱でないから、錬金術においては「神は一つ」である。

しかも、その神は、旧約の創造神を含めた「キリスト教の神」と同じものである。つまりキリスト教と錬金術は、一つの神を共有していることになる。

異なる点は、キリスト教徒は、その神による「↓」的な恵みを期待するけれども、錬金術師たちは、同じ神に向かって「↑」的に上昇していく、というところだけなのだ。

よって、ここには、互いを鏡に映したかのように“単純にして対等な”「↓」と「↑」の補償関係がある。図式的に、実にシンプルである。

そして私たちが最も求めているのは、まさしく、そのようにシンプルな補償関係なのである。

だから「キリスト教を完成するにあたって、最も補償的な有効性がある思想的ツールは何か」と問われれば、私は迷わず「それは錬金術である」と答えることができる。

もっと言えば、私は、キリスト教を完成する者は、その一面において「必然的に錬金術師でなければならない」とさえ思っている。

上で見たように、錬金術こそは、キリスト教と神の血肉を分けあった「隠された半身」だからである。

一人の人間に置き換えるならば、キリスト教徒かつ錬金術師であってこそ、西洋人（あるいは西洋の宗教を語る者）は、その宗教的不具の状態から逃れることができるのである。

神としての黄金を求めて

もっとも、錬金術師というと、どうしても、
「クズのような材料から、黄金を作り出して儲けようとした山師」
というイメージがつきまとう。

しかし、実際の錬金術師たちは、化学的な実験を通して、神の叡智に近づこうとした、典型的な「↑」タイプの求道者だった。言うなれば、彼らはまさに「西洋に現れた仏教徒」なのである。

というのも、まず彼らは、あらゆる物質、また物質で出来ている肉体に「潜在的な神性」が宿っていると考えていたからだ。

そして、その潜在的な神性を、科学的に抽出し、蒸留し、結晶化することが出来れば、ついに神性が「遮るものなしに」輝くと考えていたのだ。

これは、化学的変性に置き換えられただけの、立派な「如来蔵思想」である。つまり、

「すべての人間のなかに種子としての仏性が宿っている」

「修行によって仏性を顕現させれば誰でも仏になれる」

という仏教思想と同じものである。

したがって錬金術は、化学でありながら宗教でもあった。錬金作業によって結晶化した神性は——もちろん物質的には黄金のことであるが——これを宗教的に表せば「神そのもの」と言い換えられるからである。

そして実際に錬金術師が、その黄金を生成したとしよう。あるいは神を認識（グノーシス）したとしよう。

そのとき彼は、象徴的に「人間の神化を果たした者」となる。つまり「人間＝神」の体現者となる。

そして、これを鏡写しに表現すれば、彼はそのとき「神＝人間」の体現者になったことになる。すなわち「人間＝神」＝「神＝人間」ということだ。

そして「神＝人間」であるならば、このとき彼は、象徴的に「人間化を果たした神」になったのである。あるいは「人の子となった神」になったのである。

ということは、彼は「人の子」を自称した「イエスの再出」に当たるということである。そして、それはすなわち「第二のキリスト」の誕生に他ならない。

（２）錬金術の栄光と凋落

ルネサンスの輝き

ここからは、錬金術とキリスト教の、その歴史的な関わり合いについて眺めてみよう。

そもそも典型的な「↓」の宗教である、キリスト教においては、人間の「意志」や「努力」には、さしたる重要性が与えられない。このことは周知の事実である。

それと同じように「物質」や「肉体」もまた、キリスト教から軽視され続けてきた要素だった。つまりキリスト教では、物質や肉体のなかに、神はいないと見なされてきた。

神性は、あくまでも「恩寵（神からの恵み）によって」「上から」やってくる。だから物質や肉体のような「下なるもの」は、恩寵によって栄光化されないかぎり、何の価値もない、ゴミのようなもの」のままなのである。

ところが、西洋錬金術の成立以来、その理念（如来蔵思想）によって「物質や肉体にも、神性が宿っている」という新説が掲げられるようになった。

そして、それにより「物質、肉体の聖化」とも言うべき文化が花開いた。

つまり物質や肉体の価値を見直し、これらを賞賛する文化が成立したのである。それこそが14世紀から15世紀に盛期を迎えた「ルネサンス（再生）」である。

もともと古代のギリシア・ローマでは人間の肉体美が賞賛されており、それが多くの彫像という形で表現されていた。

そうした彫像は、中世という歴史と、実際の土に、長らく埋もれてしまっていた。が、それが14世紀のイタリアで、偶然発掘されたのである。

人々はその彫像（＝肉体を表現した物質）の美しさに驚嘆した。そして、そこから肉体と物質の価値が、改めて見直されることになったのである。

それはまさに「ギリシア・ローマ」「肉体・物質」の価値の再生（ルネサンス）だった。

そして錬金術の如来蔵思想は、ルネサンスの、そのような歴史的経過の、思想的バックボーンとなったのである。

下なるものの栄光

実際、ボッティチェリの女性像、ミケランジェロの男性像を見ると、誰しも、その肉体の輝きに圧倒されずにはいられまい。そして、その輝きを生み出したものこそが「そこに神性が宿っている」という、芸術家たちの確信なのである。

そもそも絵や彫刻は物質であり、しかも、そこで表現されているものは肉体である。だから「もしキリスト教倫理によって創られたならば」それらは結局、精神的価値のない、単なる木石と化すしかない。

しかし「錬金術的理念をもってすれば」その木石にも、立派に神の精神が宿るのである。

ミケランジェロの『最後の審判』など、実に神々しい肉体美が、画面からはちきれんばかりに表現されている。もちろんシスティーナ礼拝堂を飾る、あの壁画の話である。

この有名な壁画こそ、キリスト教の「↓」とは“逆の倫理”によって描かれた「キリスト教芸術の最高傑作」ではないだろうか。

なにしろ後年、教会ご用達の「腰巻画家」が修正する前は、そこに、人物の陰部まで、神々しく描かれていたのだ。

つまり、肉体の中でもとりわけ汚らしい陰部さえ、ミケランジェロは、それを「神宿る物質」として堂々と描いたのである。

もちろん教会にとっては、礼拝堂の壁画に陰部を描くなど、実にけしからん話であろう。それは全くもって、キリスト教的なことではない。

だが、そのように教会にとって“実にけしからん”作品が、他面では、キリスト教芸術の最高傑作なのである。まさにアイロニーの極みと言ってよい。

美術の分野ではかくの如きだが、文学、哲学の分野では、人間の自由意志に重きを置く「人文主義」が、知識人たちの教養ベースになった。

フィチーノや、ピコ・デラ・ミランドラなどが、いわゆる人文主義者（ヒューマニスト）として有名だ。

のちにルターの『奴隸意志論』に駁論されることになる『自由意志論』を書いたエラスムスもまた、当然この系譜に連なっている。

つまりは、この時期、教会も手がつけられないほど、錬金術的倫理が、社会的な力を持ったのである。

このような状況をして、ついに「↑」のベクトルが、ヨーロッパ文化の表舞台におどり出た、とも言えるだろう。

もっとも、この時代にあっては教皇（ユリウス二世）までが古典文化（ギリシア・ローマ）の愛好家であったのだが。

刹那の輝き

しかしルネサンスは、歴史的に見れば、刹那の輝きに過ぎないものである。それが長い期間にわたる伝統になることは、ついになかった。

なぜなら、早くも 1494 年頃には、サヴォナローラの神権政治が始まるからだ。

かのミケランジェロもこの時期には、ルネサンスの都であるフィレンツェを離れざるを得なかった。

サヴォナローラは、フィレンツェ市民に「キリスト教徒としてのモラルを取り戻せ」と説教した。そのためには「ルネサンス的な絵や書籍など、ことごとく燃やしてしまえ」と指示したほどだった。

そうしてフィレンツェ市民は、このサヴォナローラによる過酷な指示に、まさに肅々と従うことになるのである。

それはほとんど盲従と言ってよかった。つまりフィレンツェ市民の大部分が、宗教的な盲従者になってしまったのだ。

ことに、サヴォナローラの説教に打たれて感涙にむせぶほどの人たちは、特徴的な呼び方で「ピアニョーニ」と称された。これは「泣く人」という意味の言葉である。

この泣いているピアニョーニの姿に「クリスチャンの罪悪感」を見るのは、私だけだろうか。すなわち「↑」的なルネサンスによって「↓」から逸脱してしまった、クリスチャンたちの罪悪感と悔悟を。

いずれにしても、事実として、人々は泣きながら教会の懷へと戻っていったのだった。

物質と肉体の輝きを、キリスト教倫理によって、再び封じ込めたサヴォナローラ。そのあまりにも性急な神権政治は、結局のところ、ごく短命に終わった。彼は市民たちの手にかかって火あぶりにされてしまったのである。

だが、かの宗教改革は、すぐそこまで迫っていた。

時きたれば、ルターやカルヴァンが現れる。彼らこそが、キリスト教の「↓」を、極限まで徹底させる役回りだ。

したがってルネサンスで花咲いた「自由意志の尊重」や「物質、肉体の聖化」は、そのとき一気に無力化されてしまう事になるだろう。

（３）時代から取り残される

古くさい思想

ルネサンスの凋落は、その思想的バックボーンである、錬金術の凋落でもあった。

もともと錬金術は、キリスト教にとって、明らかな異端思想ではあった。

だから「結局は、どこかの時点で、キリスト教によって淘汰される運命にあったのだ」と、そのように言おうと思えば言えなくもない。

とはいえ錬金術の場合は、淘汰されたといっても、かつてのグノーシス主義や、マニ教のように、徹底的に殲滅させられた訳ではない。あの残忍なことで有名な異端審問所で裁かれないう、上手に立ち回り、その多くは地下にもぐったからだ。

しかし、デカルト（1596～1650）の合理的な哲学が出現したあたりから、錬金術に対する、人々の関心は本格的に、かつ急速に薄れていく。

というのも、デカルトの明晰性を重んじた哲学と比べると、錬金術哲学の論述スタイルは、人々にとり、あまりにも古臭く、黴臭く感じられたからだ。

なにしろ錬金術哲学は「あいまいなるものを、さらにあいまいなる表現によって」言い表すということを、自己のモットーにしているのである。

対して一般の知識人たちは、すでにその頃には、明解で論理的な“近代的自我”に目覚めつつあった。そうなってしまえば、錬金術が古ぼけて見えたとしても仕方があるまい。

だが、私はそれでもなお、錬金術哲学を擁護せずにはいられない。そこには確かに、合理性をも超える高次の真理が、それこそ浜辺の真砂のように含まれていたからだ。

そして、それを表現するためには、彼らはどうしても非理性的な、あいまいなる表現を駆使せざるを得なかったのだ。

それは何も錬金術に限ったことではない。たとえば、悟りについて書かれた仏教の経典だってそうではないか。そこには、どう見ても論述とは呼べない、不可思議なレトリックが、延々と書き連ねてある。

つまり、文章の非論理的であることは、宗教的に高い真理を伝える者にとって、ほとんど宿命に等しいことなのである。

そう、錬金術哲学には、たしかに真理が記されていたのだ。デカルトやカントでは、到底達しえなかったほどにも、高次元の真理が。人間理性の座標をさほど超え出なかった哲学者では、決して見ることの出来なかった霊的な真理が。

ゲーテの『ファウスト』

しかし17世紀になると、錬金術は、確実に「過去のもの」となりつつあったし、その17世紀も後半に至ると、事態はさらに決定的なものになった。それを象徴するような出来事が、ヨーロッパの文学史上にあるので見てみよう。

この頃ドイツの文豪であるゲーテが『ファウスト』という劇詩を書いている。何を隠そう、この作品の主人公は、ファウストという名前の“錬金術師”である。

しかしゲーテは、現代劇の主人公としては、ファウストを描かなかった。いや描けなかった。

ゲーテは終始「昔の時代を追想しながら」この主人公の活躍を、描出しなければならなかったのである。なぜなら、生き生きと活躍する錬金術師は、もはや過去の世界にしか存在しなかったからだ。

つまり『ファウスト』が上梓されたときには、錬金術は、もはや完全に「過去の遺物」になっていたのである。かつての光輝に満ちた「錬金術の時代」は、少しばかりの残骸だけを遺して、いまや音もなく過ぎ去っていたのだ。

『ファウストの価値』

それでもゲーテの『ファウスト』が、文学的表現による、錬金術の最高の昇華であること。また、この『ファウスト』が、西洋人に対して、聖書に準ずる心理的影響を与えたことは、疑いの余地がない。

ドイツ文学だけではなく、西洋全体の文学史の中でも、ゲーテの『ファウスト』は、傑作として、その最高峰の地位を占めるものである。

それは強烈な影響力を秘めた作品だった。そして、その芸術的な影響力によって、錬金術由来の「↑」は、数多くの人々（読者）の心へと届くことになったのだった。

事実『ファウスト』のラストシーンに現れる「永遠に女性的なるもの」は、それを一つの象徴として見れば、じつは「十字架上のイエス」と同等の精神的高みにある、と言えるのである。

とすればである。私たちは『ファウスト』を読むことによって、この高次の象徴に「下から上に向かう形で」到達することができるのだ。没入的な読書によって。あの求道者的な主人公を追読することによって。

むろん、そのために必要な、芸術的感受性があって、初めて成立することではあるけれども。

（４）錬金術から科学へ

宗教という土俵から降りる

さて『ファウスト』を書いたゲーテは、
「文学は、それが宗教的であるときのみ、生産的である」
と言っている。これは私にとっても座右の銘である。

とはいえ人々が、彼の『ファウスト』を、実際に宗教的次元で捉えたかどうかは分からない。いや、たぶん、そういう事は、まず無かったのだらうと思う。

多くのヨーロッパ人にとって、ゲーテの『ファウスト』は、あくまでも「芸術的な感興を与えてくれる作品」に過ぎなかった。

つまり『ファウスト』から得られる感動は、人々にとって「芸術を鑑賞したさいに生じるもの」を超えることがなかったのだ。

だとすれば、ゲーテの時代、もはや錬金術は、宗教という土俵からは、すっかり姿を消し去っていたのである。かつての錬金術は、たしかに「科学であると同時に宗教」であったはずなのに。

近代科学

とはいえ、錬金術もまた——グノーシス主義と同じように——その思想的子孫を残していた。それが近代科学である。

科学者ニュートン（1643～1727）は、ほとんど「隠れ錬金術師」であるし、地動説で有名なコペルニクスや、ジョルダノー・ブルーノ（宇宙の無限を主張し、地動説を擁護）なども、錬金術の根本思想である「ヘルメス文書」に通じていた。

ヘルメス文書とは、ヘルメス・トリスメギストス（三倍も偉大なるヘルメス）によって書かれたとされる文書で、三世紀頃のエジプトで成立した。本章の冒頭で触れた『エメラルド板』もヘルメス文書に含まれる。

このヘルメス文書においては、太陽崇拝が顕著である。そのため「太陽が地球を回っている」とする天動説は、ヘルメス文書に親しんでいたコペルニクスに、
「いや、地球のほうが“太陽さま”を回っているのではないか」

という疑念を抱かせることになる。これが地動説（1543年）が生まれる端緒であったことは間違いないだろう。

実に、近代科学の母体は錬金術（ヘルメス思想）だったのである。

「↑」を捨てた科学

ただし、それから 200 年ほど時代を下った 19 世紀の自然科学には、「↑」、すなわち「悟り」や「人間の神化」の要素は含まれていない。

この時代の科学者にとっては、錬金術師たちが持っていた「物質の化学的変容を通して、そこから霊的認識を見出そうとする宗教性」などは微塵もないのである。

つまり錬金術が「科学と宗教の融合」だったとすれば、自然科学は、まったく宗教要素をもたない「単なる科学」なのだ。

それも道理かもしれない。なぜなら、そのような宗教的要素を含んだとたん、それはキリスト教に抗う「異端」になってしまうからだ。

もちろん、かかる異端を奉じれば、その科学者は、自動的に異端者となるだろう。そして、そうやって異端者になったとたん、彼ら科学者たちは「宗教的迫害に怯える弱者」という不利な立場に追い込まれてしまうのである。

コペルニクスの地動説を実証した、ガリレオが異端審問を受けたことは有名である。ジョルダナーノ・ブルーノに至っては、現実に火刑に処されている。普通の人間なら、誰だって、そんな酷い目に遭いたいとは思わないだろう。

それゆえ自然科学は、宗教的フィールドから遠く離れ、ただただ世俗性と無神論の中でのみ、その発展を続けた。

そして、そのような「宗教性との線引き」を確実にするためにも、科学者たちは、ことさら科学と錬金術とのつながりを隠蔽した。

そればかりか彼らは、錬金術を歪曲的に貶めた。現在において、錬金術師とは「クズのような材料から、黄金を作り出して、儲けようとした山師である」という世評が固まっているのはそのためである。

弱体化したキリスト教会

それにしても、自然科学が「宗教的フィールドから遠く離れる」などということが、どうして可能だったのだろうか。

というのは、結局ヨーロッパ世界とは、イコール、キリスト教世界であり、そのフィールドの中には、キリスト教的でない空間など、かつては一切なかったからである。

少なくとも中世までは、真実にそうだった。ヨーロッパ世界で、宗教的フィールドから遠く離れようとしても、宗教的フィールド以外の領域（範囲、ジャンル）など、どこを探しても無かったのである。

しかし自然科学は、いまや見事なまでに、宗教的フィールドから遠く離れている。

それを可能にしたのは、キリスト教会の弱体化だった。

その弱体化によって、聖職者たちの手が及ばない「範囲」がヨーロッパに生まれ、教会の手が届かない「ジャンル」がヨーロッパ人に生じたのである。

そして、その空洞化したカテゴリー（範囲・ジャンル）に自然科学が入り込んでいったという訳だ。

この新しいカテゴリーに干渉してまで、相手を諫めるには、19世紀のキリスト教会は、あまりにも無力になってしまっていた。

これには「三〇年戦争」によって生まれた、キリスト教信仰に対する、民衆の「疲れ」の影響がたいへんに大きい。

三〇年戦争とは、カトリックとプロテスタントの宗教戦争である。

友愛を説くはずのキリスト教による宗派争いは、確かに人々の宗教心を白けさせるに充分だっただろう。

また、啓蒙主義によって生まれた「理性信仰」も、キリスト教への信仰を骨抜きにした。これには哲学者カントの「理性で把握できないもの（＝神）には、学問は触れるべきではない」という思考的態度の影響が大きい。

宗教と科学というカテゴリー

さらには、発達した科学が、聖書の記述にそぐわない真理を発見し、それがキリスト教への不信感を生んだということもある。

まさに聖書の記述にそぐわない学説であるところの、地動説や進化論。これらは十分すぎるほどの威力をもって、キリスト教会の教義に立ちはだかった。

これらの“大きな説得力をもった”論説によって、神と人間の物語は、真理の中心から、あれよあれよという間に、引きずり出されてしまった。そのため人々は、「もしかしたら、キリスト教会というものは、それほど熱心に信じたり、尊重しなくとも良いものなのではないか」

と思うようになった。この結果、ヨーロッパ人にとっての教会は、もはや中世のような「絶対の存在」では、到底なくなってしまったのだ。

こうしてキリスト教は、西洋世界を包摂する、統一原理としての座から引き下ろされた。

もし現実に「宗教と科学」、あるいは「宗教と世俗」という、相反するカテゴリー（範囲、ジャンル）があるとすればである。

今となっては、キリスト教は、これらのうちの、その片方だけを支配する地位にまで、引き下ろされてしまったのである。

補償の頓挫

かくして「↓」と「↑」の補償関係は途切れることになる。

たとえ科学が錬金術の子孫だとしても、それが宗教性を失ってしまったなら、ここでは、さしたるレーゾンデートル（存在理由）はない。それは「テロスへの過程」、つまり「キリスト教の宗教としての完成過程」において、もはや大した役割を担い得ないからだ。

要するに、異端と呼ばれることを避けえた科学は、そのとき「↓」を補償する「↑」的

なエネルギーをも手放してしまったのである。

「↓」の宗教を完成させるのは、あくまでも「↑」の“宗教”による補償である。そして錬金術は、その本質において、確かに“宗教”だった。

だが、自然科学は宗教性もベクトルも持っていない。なにしろ、科学や世俗のカテゴリーの中では、とくに、神（＝宗教性）は死んでしまっているのだから。

そのように「神が死んでいる」のに、科学者たちの心が、天上の神に向かって上昇したりするだろうか。

そんなこと、あり得るはずもない。科学者は、身近で即物的な現実を眺めるばかりである。これが科学のカテゴリーにおける現状であろう。

しかし、目を転じて「宗教のカテゴリー」を眺めるならば、そこでは確かに、キリスト教が生きているのを見ることが出来る。

そこでは、進化論や地動説を完全に否定する「創造説」さえ生きている。キリスト教のファンダメンタリスト（原理主義者）もまた多数存在している。

そのように「補償を失ったキリスト教」は、今も「生きている宗教」として、いまだに、ほとんど「↓」一辺倒の、歪んだ姿を露わにしているのである。

第4章 パラクレートという「↑」

(1) 聖霊からの助力

キリスト教内部の「↑」

第2、3章では、主に、キリスト教の「↓」に対する「外部宗教による『↑』の補償」について見てきた。すなわち、キリスト教とは別個の宗教と言える、グノーシス主義、錬金術による「↑」の補償である。

それに対して、本章では「キリスト教の内部における『↑』の補償」について見ていきたいと思う。つまり、ここでは教会の“うちわ”が問題となるわけだ。

といっても、キリスト教の歴史とは、まさに「↓」を、どこまでも徹底させていった歴史である。それについては、第1章で概観したとおりだ。

よって、キリスト教内部における「↑」の要素は、それがあったとしても、当然のこと、ごくごく僅少なものでしかない。

そして、それほどにも僅少な「↑」の中であって、まことに瞠目すべき「↑」を語っているのが『ヨハネによる福音書』なのである。

ヨハネによる福音書

キリスト教の聖典である新約聖書には、四つの福音書が含まれている。

福音とは「よき知らせ」のことであり、福音書は、その「よき知らせ」を携えて受肉した、イエスの言行録である。というよりは、イエスの受肉そのものが、福音書における「よき知らせ」であるのだ。

なお歴史的事実とは異なるかもしれないが、従来、四つの福音書の作者は、それぞれマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネだとされている。

その中でも、マタイ、マルコ、ルカによる福音書は、まとめて「共観福音書」と呼ばれている。

それらは共観表（シノプシス）を作れるほど共通項が多い。つまり共観福音書は「イエスを捉える観点が共有されている福音書」なのである。

そして、われわれの言葉でいえば、共観福音書に含まれる三書は「いずれも『↓』の傾向が強い」。

福音書の成立史を見ていけば、まず最初に書かれたのが『マルコによる福音書』だと言われている。

そして、この『マルコ』をベースにして、そこにマタイとルカが、独自にアレンジを加えた。それが『マタイによる福音書』と『ルカによる福音書』なのである。

だから、それら三書の内容が似てくるのは、しごく当たり前のことなのだ。

だが、唯一『ヨハネによる福音書』だけは、明らかに毛色が違っている。というのも、この福音書だけは『マルコによる福音書』をベースにしていないのである。そのぶん自然と、書物としてのオリジナリティが強くなったのだと言えよう。

だが、違いはそればかりではない。何より重要なのは、この福音書が、共観福音書に比べて、破格に「↑」的なことである。

いや、そこには、共観福音書と同等の「↓」も描かれている。しかし、その反面、『ヨハネによる福音書』には、共観福音書とは比べ物にならないぐらいの「↑」の要素も盛り込まれているのである。

そのため『ヨハネによる福音書』は、「↑」の体現者であるグノーシス主義者たちからも、大いに好まれていたという。

パラクレートの思想

そんな『ヨハネによる福音書』の中で、最も「↑」の要素が強く表れているのが「パラクレート」の思想である。このパラクレートは——後段で語るように——複数の語意を含んでいる。だが日本の聖書では、パラクレートは、まず第一に「弁護者」と訳されている。

弁護者の役割は、人間を守り、イエスが説いた真理を悟らせることにある。

——真理の霊、パラクレートが来ると、あなたがたを導いて、真理をことごとく悟らせる。罪について、義について、また、裁きについて、世の誤りを明らかにする。また、私（イエス）についても証をなさるはずである——

『ヨハネによる福音書』より

つまり、

——パラクレートの任務は、人間一人一人の中に宿って働きかけ、彼らにキリストの教えたことを思い出させ、彼らを〔真理の〕明るみに導くことである——

ユング『ヨブへの答え』林道義訳より

よって弁護者は、人間への「霊的な助け手」とであると言えよう。

そして『ヨハネによる福音書』において、イエスは明確に次のようにも言う、「この方は真理の霊である」「霊である」と。

パラクレート＝聖霊

そう、弁護者であるパラクレートは、実のところ、父と子に並び立つ、三位一体における第三の位相——「聖霊」と同じものなのだ。

三位一体の教義において、父とは、創造主である神を指す。子とは、神であると同時に人間でもある、イエス・キリストを指す。そして聖霊とは、『ヨハネによる福音書』にあっては、パラクレートを指す。

パラクレートの詳しい働きについては後述する。ここで確認しておきたいのは、三位一体の教義のもとで、パラクレートは、神やキリストと同等の存在だということである。なにしろ、それらは「一体」なのだから。

そして、それほどにも強大なものが、人間に「霊的な助け手」として働きかけるのである。それも、イエスが説いた真理を悟らせるために。

そうだとしたら、パラクレートの働きを受けた人間は、当然、神のみもとへと引き寄せられることになるだろう。あるいは、神のみもとに押し上げられる、と表現するべきだろうか。

どちらにしても、ここには「人間の神化」という「↑」のベクトルが生じない訳にはいかない。

このように重大な「↑」の働きが、キリスト教の正典である『ヨハネによる福音書』には、はっきりと描かれている。

これは驚くべきことである。しかもそれは、イエスが弟子たちに、直接語ったこととして記されているのである。

弟子たちへの遺言

最後の晩餐が催された夜、裏切り者のユダが出ていったあと、イエスは自分の死を覚悟しながら、弟子たちにパラクレートについて語りはじめた。

以下に、少し分かりやすくした形で、『ヨハネによる福音書』におけるイエスの言葉を、引用、再構成してみよう。

——そのときイエスが、弟子たちに向かって言った。

〔父の代わりに私が来た。私の代わりに聖霊が来る。〕だから、私が十字架の死によって去っていくのは、あなたがたのためになる。私が去っていかなければ、パラクレートは、あなたがたのところに来ないからである。

私が死んで父のところへ行けば〔私は〕パラクレートを、あなたがたのところへ送る。

そのとき私は、父にお願いしよう。それによって父は、パラクレートを遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。このパラクレートは真理の霊である。

真理の霊、パラクレートが来ると、あなたがたを導いて、真理をことごとく悟らせる。罪について、義について、また、裁きについて、世の誤りを明らかにする。また、私についても証をなさるはずである。

そのように、私を信じる者は、私が行うのと同じ業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる。わたしが父のもとに行き〔父と一体になり、本来の偉大なる神性を取

り戻すからである。

そして、その上で」パラクレートを、あなたがたのところに送る〔からである。〕

イエス以上の業を

つまりイエスの死後、それでもイエスを信じる者には、死んだイエスの代わりとして、パラクレートという助け手が与えられるのである。

そして、その助力によって信徒は真理を悟る者となり、ついには“イエス以上の”霊的な業を遂行する者になる、ということだ。

これをもっと積極的に表現すれば、パラクレートの助力によって、イエスの死後に、イエスを超える「第二のキリスト」が誕生する、という意味にもとれる。

それはそうである。イエス・キリスト以上の霊的業績を見せるのであれば、彼が「第二のキリスト」と呼ばれる資格は、十分すぎるほどにあるだろうから。

この意味で——すでに歴史のなかで立ち消えてしまった話だが——マニ教の教祖マニは、自分こそが、そのイエスを超える、最後の預言者であると名乗りをあげている。

マニは24歳のときに霊的覚醒（悟り）を得たのだが、彼は、その悟りを与えた者こそがパラクレートであると言った。そして、さらに後年には、自分自身が、イエスが予言したパラクレートであると宣言したのである。

——マニは自分自身のことを、ヨハネ福音書のイエスが14章16節で弟子たちに約束している「弁護者」（ギリシア語で「パラクレートス」）に他ならないと考えていたという——

大貫隆訳著『グノーシスの神話』より

(2) パラクレートと教会

教会の困惑

そのように“グノーシス的な宗教である” マニ教の教祖が利用したぐらいなのだ。当然のこと、このパラクレートの思想は、キリスト教会にとっては、実に困った存在であった。

というのも、前述したように、パラクレートの思想には、
「パラクレートの助力による信徒の悟り → 第二のキリストの誕生」

という可能性が秘められているからである。上述したマニの宣言は、その試みの一つであったとも言えるだろう。

そして、この流れによって「イエスによる救済の一回性」という教義が壊れてしまうのが、教会にとっては、何よりも苦しい。

つまり、救済が二度、三度とあっては、何としても不都合なのだ。

なぜなら、そうすると「歴史上一回しかなかったイエスによる救済」の「唯一の後継者」たる、教会の正統性が失われてしまうからである。

それは、かのキプリアヌスが言った「教会以外に救いなし」という言葉が、根本的に、力を失ってしまうことを意味する。

つまり従来「イエス・キリストを除いては、教会にしか、人の罪を許す力がない」からこそ、教会の権威は、その絶対性を保っていられたわけである。

なのに、そこにイエス以外のキリスト、第二のキリストなどが出てきてしまったら、どうなるか。

答えは明白だ。とたんに教会の「救済権能の独占所有」と、そこから生まれる「権威と権力」は霧散してしまうに違いない。であるならば、教会にとって、これほどにも都合の悪い話はないことになる。

反論できない不都合な真理

しかも厄介なことに、これは、キリスト教会の内部から発生した「↑」なのである。グノーシス主義や、錬金術のように、教会の外部において発生した「↑」ではない。

そうなのだ、あろうことか、これは紛れもなく「キリスト教の正典」の中で語られている思想なのである。それだけに私としては、

「よくまあ、原始教会が、このパラクレートについての記述を削除しなかったものだ」

と感心してしまうほどだ。それほどにも威力のある「↑」が、『ヨハネによる福音書』には、確かに刻み込まれている。

そして、中世や近世におけるキリスト教会もまた、さすがに、自分たちの正典を相手どって、そこに「異端思想」のレッテルを貼ることは出来なかった。また、自分たちの正典を相手取って、そこに書かれた文章を「無かったこと」にすることは、なおさら出来なかった。

つまりパラクレートの問題は、教会にとって「決して反論できない、不都合な真実」だったのである。では教会は、その歴史をつうじて、この厄介なパラクレートの問題に、一体どのような形で対処をしたのだろうか。

パラクレートに対する無視

その顛末を、スイスの心理学者、カール・グスタフ・ユングが教えてくれる。彼は言う。

——パラクレートはなるほど形而上学的には大きな意味を持っていたが、しかし教会を組織するためには実に困った存在であった。なぜならそれは聖書の〔正典としての〕権威さえふりかざして、決して〔教会の〕統制に服そうとしないからである。

連続性を保ち教会を守るためには、逆に〔神の〕人間化と救済の業の一回性を精力的に強調し、他方で〔教会史が〕「さらに進歩した形である聖霊の宿り」をできるかぎり色あせたものにし無視しなければならない。それ以上〔キリスト教会が〕個人主義の方向にそれていくことを許すわけにはいかないのである。

聖霊によって動揺させられ偏った考え〔＝↑〕を持ったと思われたものは、必ず異端とされ、この者を打ち倒し根絶するためにはサタン顔負けのやり口が取られるのであった。

もちろん他方では、もし各々が自らの聖霊の直感を他人に押し付けて教義全体を改良しようと思ったなら、おそらく当時のキリスト教はたちまちのうちにバビロンの言語混乱に陥り、またたくまに崩壊してしまったであろう、ということも理解しなければならない——

ユング『ヨブへの答え』林道義訳より

無視しても存在はなくなる

つまり、パラクレートの問題に対して教会が行えたことは、結局「無視」だけだったのだ。

もっとも、その黙殺の仕方には「サタン顔負けのやり口」が取られたという。したがって、もしその具体例を聞いたならば、我々の背筋が凍るような「無視」だったのだろうけれども。

そのように教会は、パラクレートの問題を、徹底的に、積極的に無視した。

とはいえ「無視すれば、その問題そのものが無くなる」という道理は、決してない。

たとえば、小学生が夏休みの宿題を無視して、あたかもそれが無いかのごとく生活し

ようとも、その宿題は確かにあるのである。決して無くならないのである。

そして宿題するのを怠けた子供は、結局、夏休みの最終日には、その詰め腹を切られることになる。

それと同じように、どれほど教会が、黙殺、隠蔽をしようとも、パラクレートの助力は、キリスト教会に向けて、確かに働きかけていた。長い歴史（教会史）を通して、その働きは確かにあったのである。

よって、そろそろ教会は、その詰め腹を切られそうな気配が濃厚である。

つまり、この聖霊（パラクレート）の働きは、その無視を乗り越えて、今こそキリスト教を、その究極の状態（完成と終末）に導こうとしているのだ。本書の第一部で見たように、それが宗教の宿命であるがゆえに。

第5章 ユングという「↑」

(1) 科学から芽吹いた「↑」

科学万能の時代

ここで第3章「錬金術という『↑』」の終わりのところに戻りたいと思う。間が空いているので、そこでの流れを簡単に振り返ってみよう。

錬金術は、コペルニクスやニュートン等による近代科学を生み出した。

しかし18、19世紀ともなると、その科学は「↑」の要素を捨て去って、世俗的、無神論的な自然科学となってしまった。

錬金術は本質的に宗教であったし、近代科学には宗教性の残り香があった。だが19世紀の自然科学となると、もはや宗教性と全く断絶してしまっていた。

具体的に言えば、ダーウィンの無神論的進化論や、マルクスの唯物論的社会科学がその代表例と言えよう。ここでは理論上、かのニーチェが言ったように「神は死んだ」ことになっている。

要するに科学者たちは、宗教性というフィールドから逃げ出したのである。

それは、そもそもは教会から「異端」と呼ばれないようにするためだった。これが行われたのは、錬金術から科学への更新が行われた時期である。そして彼ら科学者たちは、おずおずと独自の小コロニーを創った。

しかし、いつしかそこに増長の気運が生じた。科学者たちは、その箱庭のような自分たちのコロニーをして、

「このコロニーは小さなものではない。きわめて大きなものだ。世界そのものなのだ」と喧伝しはじめたのだ。これこそ科学万能の時代の幕開け宣言である。

事実、しだいに科学のコロニーは、不信仰な人々によって実際に拡張され、ほとんどヨーロッパ全体を覆うかのようなになった。つまり西欧世界そのものが「自然科学のコロニー」になったようなものである。



2022-06-22 (1) .png

ユングの登場

そのとき宗教は、気づけば、時代の隅に追いやられていた。

キリスト教は、表面上は西欧世界の主賓のようであったが、実質的な力は半ば失っていた。

それはすでに「宗教」と「科学」という二つのコロニーの、片方を営むだけになっていたのである。むしろ 20 世紀以降は“小コロニー”を営んでいたのは、宗教のほうだったかもしれない。

こうなると、誰かが教会の意にそぐわない言動をとっても、そうそう教会から反撃を受けなくても済むようになってくる。既存の権力が失われるとはそういうことである。

もはや異端審問も魔女狩りも、教会には実行不可能だった。教会が“不屈き者”に出来るのは、せいぜい「破門」の通牒をちらつかせる事ぐらいだった。

もちろん、キリスト教から破門されれば、西欧世界では、その社会的信用が地に落ちる。これは 19 世紀、20 世紀にあっても、かなり怖いことだ。

だからといって、それで破門された者の肉体的生命が奪われるわけではない。

これは中世と比べれば大きな変化である。やはり 19 世紀以降は「異端者にとって生きやすい時代」になったとは言えそうである。

そして、そのようなタイミングを見計らったかのように、ここに科学者として、あるいは科学的な異端者として「↑」の研究を始めた者がいた。きっと今ならばそれが出来るのではないか、という予感のもとに。

教会からの迫害、異端審問、焚書などによって、それに関わることを脅迫的に禁止されてきた「↑」——その研究を、彼は自然科学の名のもとに開始した。

つまり彼は、キリスト教の枠内には出来ないことを、それとは別枠である「科学の領域」で行ったのである。

それが、科学者として人間の心を探求しながら、ついに宗教的領域にまで、足を踏み入れることになった心理学者、カール・グスタフ・ユングである。

ユングの目覚め

もっともユングは、初めから「↑」に着目した訳ではない。

「↑」は宗教的なベクトルであるが、最初ユングは、宗教にさほどの関心を払ってはいなかった。若いころの——心理学における連想実験のデータを集めていた時の——彼などは、本当に純然たる自然科学者だったと言っていい。

しかし、そうやって科学的に“心”の検証を行っていくうち、ユングはどうしても「↑」の存在を無視できなくなってくる。

というのも、結局人の心は、深く掘り下げれば、それが誰であっても宗教的だからである。たとえそれが、無神論的な病人の心であったとしても。心の深層を隈なく探求すれば、人はそこに、どうしても宗教性を見ることになるのだ。

また自己欺瞞的に、科学者として「↑」を無視しきるには、ユングの本性はあまりに

も宗教的であったし、また霊的であった。彼は元来、日常的に幻視をしたり、霊夢を見たりする人だったのだ。

そんなユングは、いつしか「↑」を、自身の中心的な研究テーマにするようになる。

もちろん、世が科学万能の時代であるだけに、そこには大きな葛藤もあった。すなわち、宗教的な研究など「時代の潮流」には、全くそぐわないのである。

ユングの恩師である心理学者、ジークムント・フロイトなどは、人の心を研究しても、あくまで自然科学の領域に留まった。学者として生き続けるならば、それが「時代の潮流」に合う“正解”だった。

だがユングは、そんな恩師と決裂してまでも、宗教の領域へと踏み入ってゆくことになる。何としても気にかかる「↑」を探求するために。

オカルトと呼ばれる「↑」

もっとも、当時のヨーロッパでは、「↑」は宗教とは呼ばれない。19世紀の西洋人にとっての宗教とは、キリスト教だけだからだ。

とすれば、彼らにとって「↑」とは何なのか。人間の神化を目的とする、認識型の宗教とは何なのか。その答えは「オカルト」である。

オカルト——それが私たちにとり、非常にいかがわしい印象を与えられる語句であることは間違いない。

だが、本来オカルトとは「隠されたもの」という意味の言葉である。それが現在、不当に、侮蔑的に使われているだけなのである。

そのように「オカルト＝隠されたもの」だとすればである。19世紀ヨーロッパにおけるオカルトとは、要するに「キリスト教によって隠された、異端的なもの」ということになるだろう。

そして、これまで本書を読んできた人には明らかなように、グノーシス主義、錬金術、パラクレートの思想とは、つまり「↑」とは、まさしくそれに他ならなかった。

それだから「科学万能の時代における自然科学者」であるフロイトは、ユングに、「どうかオカルトの世界に踏み込まないでください。そこに踏み込んでしまったら、心理学は、もはや科学ではなくなってしまいます」

と訴えたのだった。しかしユングはそれに対して、「しかしオカルトに踏み込まなければ、心理学は完成しないのです」

と答えた。ここに本章のタイトルである『ユングという「↑」』という文章が成立する契機が生まれた訳である。

なお、ここに掲げたユングとフロイトの会話は、厳密に言えば、現実のものではない。二人の立場を模式的に扱って、私が創作した会話である。

実際には、ユングが、グノーシス主義や、錬金術にのめり込んでいったのは、彼がフロイトのもとを離れていった後のことだった。

(2) ユングの「↑」研究

異端的な深層意識

少しだけ話を戻すが、心理学者であるユングは、精神科の医師でもあった。だから多くの「心のバランスを失った患者」たちが、彼のもとを訪れることになる。彼らは主に、精神分裂症の患者たちだった。

そうして精神科医として患者たちと接しているうちに、ユングはある事に気づくようになる。

それは患者たちの「キリスト教の教義によって支配されている表面意識」の下に、その表面意識によって隠された「異端的な深層意識」があることだった。

——われわれの夢や幻覚に出て来る象徴の歴史的源泉が中世をも超えて古代にまで及んでいるとする場合、その大部分がグノーシス派から出ているものであることは疑いの余地がありません。

かつて一たん抑圧せられた心理状況が、それを抑圧した条件〔＝キリスト教〕を支えていた根本理念の勢力が衰えた瞬間を捕えてふたたび擡頭するということも、あえて考えられないことではないように思われます——

ユング『人間心理と宗教』濱川祥枝訳より

対象が正常人であれば、おそらく、この心理構造は隠されたままだっただろう。

しかし精神分裂症の患者の場合、その症状の一つに「表面意識のひ弱さ」というものがある。あるいはそれを「表面意識と深層意識をへだてる壁の薄さ」と言い換えてもよい。

いずれにせよ、こうした症状のため、彼ら分裂症患者の深層心理内容は、容易に、意識の表層まで浮かび上がってきてくれるのである。

こうしてユングは、人の心のオカルト（隠されたもの）を直接目にするようになった。しかも明らかに「↑」的なオカルトを。

つまり、表面意識が一面的に、キリスト教の「↓」に支配されているため、普段意識されない深層意識のほうに「↑」の内容が追いやられていたのである。

——西洋の文化伝統においては、悟りを得ようとする努力を歓迎するようなものはないし、宗教的価値の管理者である教会ですら、そんなことは喜ばないからである。

それどころか、教会制の存在理由は、個人による根源的体験（＝悟り）の獲得にはすべて反対するところにある。なぜなら、教会制度を通さない根源的体験（＝悟り）というものは異端でしかないからである——

ユング『東洋的瞑想の心理学』湯浅泰雄、黒木幹夫訳より

病理と治療

あくまでも「↓」だけを正統とみなし、「↑」はオカルトとして貶める——この宗教的円満（＝↓と↑の均衡）を許さない心理構造が、慢性的にヨーロッパ人の心を歪ませていた。

つまり表面意識が「↓」の方向に矯正されすぎたため、人間本来の適正なバランス感覚が、失われてしまっていたのだ。

このアンバランスが、西洋の「心理的な空気」を、病的に暗くしていた。そして、その汚染空気の極端な犠牲者として、あの精神分裂症の患者たちがあった。

——神経障害の本質は、要するに本能疎外にある。ある種の心的な根本事実からの、意識の分裂にある。

ユング『こころの構造』江野専次郎訳より

つまり彼らの病気の根源には「↓と↑の不均衡」という問題があったのだ。そして精神分裂症の患者たちは、彼ら自身の病状を通して、ユングにこの病理を教えたのだった。

かかる病理を知ったとき、精神医科ユングは、直感的に、この病気の治癒法をも見つけたようである。

すなわち、この病的な状態から脱するためには、我々ヨーロッパ人もまた「↑」の内容を、その表面意識上に乗せなければならない、と。

そうして、意識上で「↓」と「↑」の均衡を取り戻さなければならない。患者だけでなく、ヨーロッパ文化全体が、そうした「本来的宗教性」を回復させなければならない。

とすれば、これはもはや、民族的なスケールを持つ課題である。一介の開業医が取り組むようなことではなく、より広範な影響力をもつ“心理学者”が取り組むべきことである。

このことを確信したとき、ユングによる、歴史的な「↑」の研究が始まった。

グノーシス主義研究

ユングは、まずグノーシス主義の研究を始めた。

彼の思想的嗅覚は驚くべき的確さを持っていたと言えよう。もしもグノーシス主義の全貌を掴めたならば、ユングは、自分が知るべきことの、すべてを知ることが出来ただろうからである。

その証拠に、日本の心理学者である林道義氏などは、ユングのグノーシス主義論を出発点にして、ナグ・ハマディ文書（後述）など、豊富なグノーシス主義資料を渉猟した

末、ついに、次のような結論を出している。

——グノーシス主義をキリスト教から分かつ（中略）重要な特徴は、神性に由来する救済力が人間に生得的に備わっているという考え方であった。

キリスト教とグノーシス主義は人間の自己実現に必要な心理的要因を半分ずつもっていたのである。つまりキリスト教は神の人間化を、グノーシス主義は人間の神化を。

不幸にして両者は相手を敵と見て相争ったが、実は互いに自身の欠けたところを補ってくれる存在だったのである——

林道義「グノーシス主義の光と闇」より
『ユング心理学の応用』に収録

ここには、本書の内容が、すべて先取りされていると言っても過言ではない。

そして、これこそユングが知りたがっていた事でもある。仮定ではあるが、ユングがグノーシス主義の内容を知悉していたら、彼自身がここまで到達できた可能性はかなり高い。

少ない資料による限界

しかし、当時のユングが集められた資料といえ、せいぜい古代のキリスト教父が書いた駁論ぐらいのものだった。

すなわち、キリスト教正統派が書いた、異端グノーシス主義への批判文書である。となれば、そこからは批判精神によって歪んだ「↑」の情報しか得られないことになる。

要するにユングは、グノーシス主義者たちの「直接の主張」には触れられなかったのだ。彼らが書いた文書は、とっくの昔に、教会の手によって撲滅させられていたからである。

——資料が教父たちの反駁書ばかりであるためもあって、グノーシス主義と現代（＝ユングの時代）を結ぶ糸は断ち切られていると思えるほど、理解しがたいものであった——

林道義「ユングのグノーシス論」より
『ユング心理学の応用』に収録

もっとも、ユングのグノーシス主義研究が始まってからずっと後（1945年）に、エジプトで、グノーシス主義者たちの「直接の主張」が発掘された事実はある。それが「ナグ・ハマディ文書」と呼ばれる古文書群である。

その一部がユングに贈られて『ユング・コデックス』と呼ばれたが、それをユングが

活用した形跡はない。

コデックスとは冊子状の文書を言うのだが、残念ながらユングには、その古代の冊子に書かれている文字が読めなかったのである。

だからユングにとって「一番それが欲しかった時期」に、グノーシス主義の資料が僅かしかなかったことは、紛れもない事実であった。そのためユングの研究対象は、ほどなくして錬金術に移ることになる。

——〔むしろ、グノーシス主義と、ユングにとっての〕現代との心理関係を明らかにできたのは、彼が錬金術を研究して心理学的に解明できたのち、それを媒介にしてグノーシスと現代心理学の間を架橋することによってであった——

林道義「ユングのグノーシス論」より

『ユング心理学の応用』に収録

錬金術研究

錬金術が教会から睨まれ、錬金術師たちが教会から迫害されていたのは事実である。キリスト教によって、錬金術は衰亡の憂き目に遭わされた。

しかし、最終的には、それは教会によって撲滅されたのではない。それは合理主義や自然科学に圧倒され、次第に「廃れた」のである。

だから錬金術は、グノーシス主義のように、跡形もないような滅び方はしていない。そして、その帰結として、ヨーロッパ文化の至るところに、錬金術の遺文や遺品が残されていた。

つまりユングの時代にあっても、グノーシス主義のそれに比べれば、錬金術に関する資料は、はるかに潤沢にあったのだ。

よってグノーシス主義研究に挫折したユングは、水を得た魚のように、膨大な錬金術関連の古文書を読みあさった。そうして「↑」についての研究を重ね、錬金術からインスピレーションを与えられた著作を、続々と発表していった。

それはいま私が思いつくだけでも『心理学と錬金術』『転移の心理学』『黄金の華の秘密』『パラケルスス論』『結合の神秘』など、実に錚々たるものがある。

これに対してグノーシス主義研究から生まれたユングの著作は、本格的なものは、ほぼ『アイオーン』一冊に過ぎない。資料の量の差が、この著作量の差を生んだのである。

ヨーロッパへの「↑」の解放

ユングの錬金術研究の成果は、上記のように、彼の著作によって世間一般に公表された。そして、その内容はいずれも「↑」のベクトルを示している。つまりキリスト教の「↓」とは異なった「↑」の宗教観を提示しているのである。

このようにして、心理学という「科学分野」を通して——その実宗教的な——「↑」が、キリスト教世界に紹介されることになった。それによって、多くのヨーロッパ人が、キリスト教による著しい「↓」偏向に対する、「↑」からの補償を受けられるようになった訳だ。

いまやユングの著作を読んでも、教会から睨まれることは全くないと言っていい。現代のヨーロッパ人は、自分が欲しいと思うだけ、ユングの著作から「↑」の補償を受けることが出来るのである。

もちろん、ユングの著作が、新約聖書の対抗馬になるほど、人口に膾炙した訳ではない。学問的に見ても、ユング心理学が、アカデミックな地位を不動にした訳ではない。

しかし、ユングの著作のような「↑」の表れが、「↓」的なヨーロッパ社会の中に、一定の足場を持ったこと。それは、これまでの西洋宗教史からすれば、相当に画期的なことだったと言って差し支えないだろう。

ユングの著作は、いまやヨーロッパからはるか離れた日本でさえ、その翻訳を読めるのである。キリスト教会は、これを「無かったこと」になど、決して出来はしない。ユングの影響力はまさしく「本物」である。

そもそも、私のグノーシス主義や錬金術の知識も、その基礎にあたるものは、まさに彼の著作から得たものなのである。

——ユングによるグノーシス主義と錬金術の再発見は、今日、キリスト教史と科学史を大きく書きかえる原動力の一つになったものである——

ユング『東洋的瞑想の心理学』

湯浅泰雄、黒木幹夫訳より

第6章 ユングという「洗礼者」

（１）思想的バプテスマ

同じことを言った二人

承知のように、今からおよそ 2000 年前のユダヤに、イエス・キリストが現れた。

しかし、そのイエスに先立って、まず洗礼者ヨハネが、かの地に現れた。新約聖書の『マタイによる福音書』に、次のような記述が残されている。

——ヨルダン川のほとりで、ヨハネは民衆に向かって叫んだ。

「悔い改めよ。天の国は近づいた（3－2）」

そしてイエスもまた、少し遅れて、以下のように言って宣教を始めた。

「悔い改めよ。天の国は近づいた（4—17）」

ということは、洗礼者ヨハネとイエス・キリストの二人は、まるきり同じことを言ったのである。まさに完全なる一致だ。

ただし違いもある。まず洗礼者ヨハネだが、彼は旧約聖書の『イザヤ書』で予言された、「荒れ野で叫ぶ者の声がする。主の道を整え、その道をまっすぐにせよ」

という言葉成就了した人物である。

つまり彼は「イエスが歩くことになる道を、歩きやすいように整えた先行者」ということになる。こうしたヨハネは、言わば「道路の整備者」の役回りと言えよう。

それに対してイエスは、ヨハネが整備した道路を、実際に歩いた人物である。

イエスはその道を一步一步踏みしめ、歩き続け、ついに、かかる道路のターミナル（終着点）に至った。この場合のターミナルとは「人類救済の業」のことである。このようなイエスの役回りは、言うなれば「道路の踏破者」ということになるだろう。

このことを、もっと分かりやすく換言するならば、洗礼者ヨハネは家の設計図を描き、イエスは実際に家を建てたのだとも言えよう。

ユングという洗礼

本書の事情は、ヨハネとイエスの関係に非常に似ている。

前章までの内容を見て、読者の中には「この著者は、あまりにもユング心理学に肩入れしすぎているのではないだろうか」と思った方もいることだろう。それどころか、「あまりにもユング派の心理学からの引用が多い。果たしてこの著者に、オリジナリティはあるのだろうか」

と疑った方もいるかもしれない。

しかし、それでよいのである。私はこの福音書シリーズの後半で、自分を「再臨のキリストである」と宣言する宿命を負っている。

そしてキリストが、バプテスト・ヨハネの洗礼を受けることもまた、キリスト教的な必然なのである。

まことにそうである。イエスがヨハネの洗礼（バプテスマ）を受けたように、私もまた、ユングの思想的洗礼を受けた。イエスがヨルダン川の水に沈んだように、私もユングの思想にスッポリと入水した。それがキリストの霊的新生にとって不可欠な「前提」であるからだ。

そう、カール・グスタフ・ユングは、再臨のキリストにとっての「洗礼者ヨハネ」に他ならないのである。彼こそはヨーロッパにおける「西洋と東洋の接点」「キリスト教と仏教の接点」「↓と↑の接点」であるからだ。

さらに言えば、彼は「キリスト教の完成と終末」の“雛型”でもある。

雛型とは、完成形の予型であり模造である。完成されてはいないが、完成までの道程を呈示し、ある程度その道程を整えてくれるものである。いつかそこに「完成者」を迎え入れるために。

完成者としてのキリスト

私は完成者の役割を命じられた。だから私は、洗礼者と同じことを言い、洗礼者が整えた道のりを「踏破」する。それが「キリストである」ということである。

あるいは、私は洗礼者が書いた設計図を頭にインプットし、その図を実際に「建造」する。それがキリストの役割である。

換言すれば、私はユングが思い描いた「再臨のキリストの在り方」を、この時代に実現させようとしているのである。

ユングは確かに、そのために必要な「設計図」を残してくれている。

すなわちユングは、再臨のキリストの役割が「キリスト教の完成」にあることを示した。そしてさらに「それがどんな状態に至ったなら『キリスト教の完成』の名に値するのか」についても言及してくれたのだった。

では、ユングに依拠するならば、キリスト教の完成とは一体何なのか。それは如何なる状態なのか。

それについて語るために、私たちはまず、彼の著作の最高傑作である『ヨブへの答え』を紐解かなければならない。

(2) ヨブへの答え

人間になろうとする神

ユングの著作『ヨブへの答え』は、ここまで西洋の宗教史を辿ってきた私たちにとって、まさに画期的な作品である。なぜなら、この作品のなかで、ついに「神の人間化」「人間の神化」という言葉が現れたからである。

かかる『ヨブへの答え』は、旧約聖書の『ヨブ記』を題材にした論文である。

そこでは過剰なまでに感情的な神が、人間（ヨブ）の真摯さに“道徳的敗北感”を覚えることになる。つまり道徳性のうえで、神が人間に負けたのだ。換言すれば、神たる者に、人間より劣等であることが宣告されたのである。

それは全知全能であるべき神にとって、何としても許容しがたい状態と言えよう。

そこで神は、自ら人間になろうとする。それによって自身のうちに“人間的道徳”という要素を獲得しようというのだ。かつてヨブによって与えられた道徳的敗北感から、リカバリー（回復）するために。

神が人間になろうというのだから、これはまさしく「神の人間化」である。

そして、そうやって「人間となった神」こそが——ユングによれば——新約聖書のイエスなのである。たしかにキリスト教において、イエスは、真に神、真に人間である存在と規定されている。

ただし、ユングにあっては「神の人間化」と「人間の神化」は同一のものであり、単なる語句の並び替えに過ぎない。当然ながら、ベクトルの方向性の違いといった観点は、どこを探しても見つからない。

この点では、前章で掲げた林道義氏の著書『ユング心理学の応用』が、ベクトルの方向性についての思索を、大きく前進させている。

そこでは確かに、上昇する「人間の神化」と下降する「神の人間化」が対比的に語られているからである。

私の発想もまた、氏の著作から大きな影響を受けていることを告白しておきたい。

神の人間化の未完遂

ユングに戻ろう。彼が『ヨブへの答え』の中で念頭に置いていたのは、基本的には「神の人間化」だけだった。彼は、その「↓」が完遂されることをもって、キリスト教の“宗教としての完成”と考えていたようだ。

もっとも、私は本書において「キリスト教において『↓』は、すでに完遂されている」という体裁で話を進めてきた。

イエスはまさに「人の子となった神」であり、その受肉によって「神の人間化」がすでに執り行われている。それだからこそ、キリスト教は「↓」を体現した代表的宗教たりうるのだ、と。

しかし、キリスト教を精密、厳密に見るならば、それは決して正鵠を射ていない。正しいことに“なりきれていない”。

つまり「あえて、精密なフィルターを通して論ずるならば」キリスト教における「神の人間化」は、今なお未完遂の状態にあるのである。

果たして真に人か

それはなぜか。それはもともと「神であること」には不足のないイエスに、しかし未だ「人間になりきれていないところ」があるからである。

カルケドン信条（451年）において「神性において完全にいまし、人性においても完全にいます方、真に神、真に人」と明言されているイエス。彼は教義上、その字面のとおりに「神であり、人間である」ということになっている。

しかし厳密に見ると、その「人間である」というところに、いまだその概念を満たしきれない「理論的な弱さ」がある。

つまり、イエスという存在のある部分を突くと、私たちはどうしても、こう断定せざるを得なくなるのである。「イエスはやはり、未だ人間にはなりきれていないようだ」と、そう。

では、どのような点が、私たちをして「イエスは、未だ人間になりきれていない」と言わしめるのだろうか。

それは端的に言って、イエスが父、母の性的な結合によっては、この世に生まれていない点である。

すなわち私は、いわゆる処女懐妊、処女降誕のことを言っているのである。この処女懐妊と降誕によって、イエスは先祖から遺伝するという「原罪」を獲得する機会を奪われてしまった。

原罪について

原罪とは、歴史的には、人類の始祖である、アダムとエヴァが犯した「神への背信行為」のことである。

彼らはエデンの園において、神が「これだけは食べてはならない」と申し渡した、いわゆる知恵の実を食べてしまった。この有名なエピソードは、旧約聖書の『創世記』に書かれているものである。

したがって、原罪の心理的本質を要約すれば「人が、どうしても神に背いてしまう性向のようなもの」だと言い得よう。

——この最初の罪によってアダムは、人祖として、自分とすべての子孫（人類）のために神からいただいた原初の「聖性」と「義」を失いました——

『カトリックの教え』ドミニコ会研究所編、本田善一郎訳より

そんな原罪は、祖先から子孫、父から子、母から子へと遺伝するのだという。

——アダムとエバは、自分たちの最初の罪のために、原初の「聖性」と「義」とが取り上げられて傷ついた人間性を子孫に伝えました。原初の「聖性」と「義」とを喪失したことを「原罪」と言います（同上）——

アウグスティヌスは、この原罪の伝わり方を「性的行為による遺伝」に求めた。知恵の実を食べたアダムとエヴァは陰部を隠したが、アウグスティヌスはそれを「二人が性行為を行ったからだ」と解釈したのである。

それは、罪と性行為が、固く結びつけられた瞬間でもあろう。この考え方は、オランジュ公会議（529年）において、教会に正式に承認されている。

つまり、シンプルに言いきってしまえば「両親によってセックスが行われなければ、原罪は伝わらない」ことになるのだ。

断ち切られた遺伝ルート

ではイエスの両親である、ヨセフとマリアの間で、セックスは行われたのか？

そのような閨房の実情は分かるはずもないが、キリスト教のドグマとしては、断じて「ノー」である。既述したように、イエスの誕生に関しては、マタイとルカの福音書によって「処女懐妊」「処女降誕」が伝えられているからだ。

——母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。

〔ヨセフは〕男の子が生まれるまでマリアと関係することはなかった。そして、その子をイエスと名付けた——

『マタイによる福音書』より

このことはキリスト教の教義の中心ともいうべき「ニカイア信条」でも、次のように確認されている。

——〔イエスは〕聖霊により、そして処女マリアにより受肉され、人間となられ……

『ニカイア・コンスタンティノポリス信条』より

言うまでもないが、処女とはセックスを経験していない女性のことである。

そうであるならば、処女のまま懐妊し、処女のまま出産を行ったマリアに「遺伝による原罪の伝達」という役割が果たせるはずがない。そこでは、遺伝という原罪伝達のルートは、完全に断ち切られてしまっているのである。

原罪を持たないイエス

私たち普通の人間は、両親による普通のセックスによって、誰であっても原罪を授けられている。逃れられぬ「遺伝」によってそれを与えられている。よって誰もが「どうしても神意に背いてしまう性向のようなもの」を持っている。

そして、その原罪が、人生のなかで具体的な形をとると、いわゆる「悪」「悪行」へと姿を移すことになる。

その悪行を裁かれる不安、悪を克服できない悔しさを、私たちは嫌というほど知っている。

と同時に、その悪から逃れられない弱さを、私たちは自嘲しつつも受容する。どこまでも懦弱な私たちには、結局そうするしかないからだ。

それでも時には、眠れないほどにも自己の悪に怯え、歯噛みして涙を流すこともある。

こうした自分や他人の姿に、私たち人間は「逃れようのない、人間としての宿命」を見る。こうした暗愚で情けない姿は、まさしく「人間」というものの、真実な本性の一面であるのだと。

ところが、原罪を持っていないイエスは、このような忌むべき本性も、宿命もまた、持っていないことになる。

本当に原罪が無いなら、そのように結論づけるしかない。イエスとは、そういう実に特殊きわまりない「人間」であるのだと。

前出のカルケドン信条でも、イエスは明確に「罪以外は、すべてにおいてわれわれに似ておられる方」と規定されている。

しかして、これを逆に言えば「罪に関しては、彼は、われわれに似ていない」ことになるのである。キリスト教の教義もまた、そのように言って憚らないのだ。

重ねて言うが、イエス・キリストは、そのような「原罪なき人間」である。まことに「そんなものでも人間と呼ぶのならば」という注意書きを添えるべき「人間」である。

この矛盾に多くのクリスチャンが悩んできた。とくに、次に挙げる文章などは、その懊悩の典型を伝えるものだろう。

——正統多数派教会のドグマは（中略）イエス・キリストは「まことに神、まことに人間」であると教える。

つまり、「神である」という述語と「人間である」という述語が両方ともイエス・キリストにあてはまり、なおかつ、どちらの述語も、いかなる保留もない十全の意味で該当するということである。

しかし、たとえば「イエスは処女マリアから生まれた」というドグマがこれと両立可

能だろうか。普通の（＝まことの）人間が処女から生まれるだろうか――

筒井賢治『グノーシス―古代キリスト教の〈異端思想〉』より

(3) 神の人間化

汚れなき正しき人イエス

ところで、前節における考察を理論展開していけば、私たちは、次のような帰結に至らざるを得ない。

イエスは原罪を持たないので悪を為さない。悪を為さないので罪人にもならない。

こうして悪と罪に無縁なイエスが行ったことは、帰結的に「全て正しいこと」になる。

ゆえに「イエスに何らかの誤りがあった」「イエスに倫理的な汚れがあった」などということは、クリスチャンならば絶対に言えない——と、そういうことになるのだ。

こうした「誤りなきイエス」「汚れなきイエス」を、クリスチャンたちは、表面的には賛美してやまない。たとえば新書版の聖書（文春新書）を解説している佐藤優氏もまた、次のように言う。

——重要なのは、イエスが真の人間だということだ。他の人間と同様に食事すれば酒も飲む。糞も小便もする。喜怒哀楽もあれば、痛みも感じる。

ただ唯一、他の人間と異なるのは、罪を持たないことだ。罪をもたないにもかかわらず、他者の罪を一身に背負って死んだ。この事実によって、人間は救われるとキリスト教徒は信じる——

だが、このような「人間イエス」観は、あまりにも気楽すぎないだろうか。浅薄すぎないだろうか。それだから心のどこかで、誰かが私たちにささやく声が聞こえてくるのだ、「そんな誤りも汚れもない者が、本当に人間と呼びえる存在なのだろうか」と。「私たちはいつも誤ってばかりで、こんなにも汚れている。なのに、イエスは“自分は全くそうではない”と言っているではないか。そんなイエスが、本当にわれら人間の同胞たりえるのか」と。

求められている人間性

畢竟、ここにキリスト教において「神の人間化」が未完遂であるという根拠がある。

たしかに、歴史的な存在としての「人間イエス」は存在しただろう。彼は「他の人間と同様に食事すれば酒も飲む。糞も小便もする。喜怒哀楽もあれば、痛みも感じる」のだろう。そういう意味では、たしかにイエスは人間であっただろう。

しかし、私たちが求めているのは、そうした生物的な人間性ではないのだ。私たちは宗教者として、もっとずっとシリアスに「イエスの人間性」を求めているのだ。

すなわち、私たちがイエスに対して真に求めているのは、私たちの悪や罪を、それを「我が事として共鳴してくれるような」人間性なのである。そういう、私たちと全く同様に「弱くて暗い人間性」なのである。

「求められていることは分かっているのに、どうしても、自分がすべきことが出来ない」「自分の悪に怯えずにはいられない」「犯してしまった罪を隠さずにはおられない」そうした“弱さ”こそが、ここでは求められている。

なぜなら、そうした弱さを持ち、そうした弱さに“真に”共感できる者に対してのみ、私たちは「宗教的な意味での人間らしさ」を感じることが出来るからだ。

そしてまた、そうした意味での「人間らしさ」を持った者に対してのみ、私たちは憚ることなく胸襟を開き、自分の衷心にある「罪の意識」を告白することが出来るからだ。

イエスにそれを求められるか

ここで翻って、自分のうちに悪も罪も持たない「ことになっている」イエスを眺めてみよう。

そうしたとき、私たちは、彼のうちに「私たちの悪と罪に共感を持てるだけの人間性」を認めることが出来るだろうか。

率直に言って、それは到底無理な話である。どうしたって「悪も罪も持たない者に、この胸のうちが分かってたまるものか」という話になるからだ。「こちらがどんなに苦しんでいようとも、それはお前にとっては、しょせん他人事なのだろう」と。

そして、こうした観点に立つかぎり、やはりイエスには、その教義上どうしても「人間らしさに欠けるところがある」と言わざるを得ない。

とすれば結果的に、キリスト教における「神の人間化」もまた、イエス・キリストの時代においては未完遂、未完成であると言わざるを得ないのである。

とはいえ、未完成であるからには、それは完成を求めずにはいられない。それについて、ユングの『ヨブへの答え』は次のように語っている。

『ヨブへの答え』から

〔本来の理念としての〕キリストは二重の意味で仲保者である。彼は神に対して人間を助け、この実在の前で人間が感ずる恐れを和らげる。彼は神と人間という結合しがたい両極の間で、重要な中間の位置を占める。

彼〔イエス・キリスト〕は〔しかし〕処女が聖霊によって懐妊した者である。彼は被造物としての人間ではないので、罪への性向を持たない。彼への悪の感染は受肉の準備によって遮断された。

それゆえキリストは人間の側より、むしろ神の側に立っている。彼は善なる神の意志のみを受肉し、それゆえ正確には中央には立っていない、なぜなら被造物たる人間の本質である罪が彼には届かないからである。

〔よって〕キリストへの神の受肉には続きと補完が必要である、なぜならキリストは処女出生と無罪科のために本物の人間ではなく、『ヨハネ福音書』第一章五節に言われているように光であったからである。

光はたしかに闇を照らしたが、しかし闇によって理解されなかった。キリストは現実の人間の外に、そして上に止まった。

しかしヨブは普通の人間であったために、彼と人類に降りかかった不正に対する償いを、神の義に基づいて神が本物の人間に受肉することによってのみ再び得ることができるのである。

この贖いの行為はパラクレート〔＝聖霊による助力＝神が聖霊として現世に侵入してくること〕によって実行される、なぜなら人間が神について苦しむのと同じように、神も人間について苦しまなければならないからである。

パラクレートの約束から推論できることは、神が完全に人間になりたがっているということ、すなわち彼自身の造った暗黒の被造物として・原罪から解放されていない人間として・もう一度生まれたがっているということである。

〔つまり〕神もまた人間になろうとし、そのために暗闇をもった被造物たる人間を・原罪によって汚され墮天使から神の科学と技術を教えられた自然のままの人間を・聖霊〔としての意志〕によって選んだのである。

受肉をさらに進めるための誕生の場としては、罪びとこそふさわしいし、それだからこそ〔罪びとが〕選ばれたのである。この世から超然としており、生への貢物を拒否する罪なき人々はそれにふさわしくない、なぜならこの人々の中には「暗い神」の居場所がないからである。

ユング『ヨブへの答え』から抜粋

キリスト教は完成を求めている

ユングの文章は難しいので、上記の文章を、箇条書きで要約しておこう。

1. 処女降誕によって、キリスト教における「神の人間化」は未完遂に終わった。
2. 本当の「神の人間化」を達成し、キリスト教を補完するために、聖霊（パラクレート）が助力するだろう。
3. パラクレートの助力によって、第二、第三のキリストが生まれるだろう。
4. この新しいキリストは、普通に生まれた「原罪を持った人間」であるべきである。
5. つまり、本物の人間である「罪人」が、神の受肉の器となるときが来るだろう。
6. その時にこそ、本当の意味における「神の人間化」が完遂され、キリスト教が完成することになる。

（４）洗礼者としての限界

ユングはその人か

では、このような主張をしたユング自身が「神の人間化」の完遂者となったか。第二のキリストとなったか。罪人、つまり真正なる人間として、神の受肉の器となったか、といえば、それは残念ながら、否定せざるを得ないだろう。

ユングの著作はかなり混沌としており、彼の意識が、明確に「神＝人間」のステージに昇った形跡は見あたらない。

当然と言えば当然であるが、人間として生まれたからには、まずは「人間の神化」の階段を昇って、「人間＝神」のステージへと到達するのが筋である。

そして、そこで向きを変えて「神＝人間」の方向に舵を切り、「神の人間化」のスロープを降りてきてこそ「人の子となった神（＝キリスト）」の再臨と言えるのである。

けれども、私が見るかぎりユングは「人間＝神、神＝人間」という山頂に立った経験を持っていない。現代においても、やはり道を整える者（ヨハネ）と、道の踏破者（キリスト）の格は幾分か異なるのだろう。

ユングには「ポスト洗礼者ヨハネ」としての限界があり、その限界のため、どうしても、イエス・キリストにはなれなかったのである。

——およそ女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネより偉大な者は現れなかった。しかし、天の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である（マタイ）——

宗教者ではなかったユング

何よりもユングは、宗教者にはならなかった。それは彼にとって、身の危険を意味していたからである。そして、この危険と『ヨブへの答え』の関わりは、とりわけ強いものがある。

すなわち、彼の他の著作では顕在化しなかったのだが、こと『ヨブへの答え』に対しては、教会のユングに対する敵対心が、ハッキリと顕在化したのだ。この本のテーマが、あまりにも「キリスト教の教義の中核部分」に触れていたからである。

じっさい『ヨブへの答え』に対する、教会からの非難や批判は、相当なものだった。腐っても鯛と言うべきか、教会によるそれは「異端審問の寸前」と言ってもいいものだったのである。

もしもユングが宗教者然として「神の人間化の完遂＝第二のキリストへの待望」について語り続けていたならば、彼は間違いなく教会から破門されていただろう。

それぐらい『ヨブへの答え』は、キリスト教会の逆鱗に触れる内容を滔々と語っていた。それだけに、本当に危険に晒されていたのは、ユングの社会的生命よりも、もしかしたら肉体生命のほうだったのかもしれない。

となれば、ユングには、どうにかして自分自身の安全を確保する必要があった。

そのためにこそ彼は、宗教家にはならなかったのだ。つまりユングは、終始「オカルト研究者」の範疇に、その身を留めたのである。むろん、師であるフロイトのように「自然科学者のカテゴリー」にまでは撤退しなかったけれども。

だが、これによって「宗教家ユング」の成立は頓挫せざるを得なかった。ユングは飽くまでも「オカルティックな心理学者」として一生を終えたのである。

以上の理由から、ユングは決して「第二のキリスト」と呼べる人物ではないことが分かる。キリストはやはり宗教家であるべきだろうからだ。

とはいえ、ヨーロッパにおける「↓に対する↑の補償」を考察するときに、ユングが、その最も重要なキーパーソンとなることは間違いない。

第7章 七つの巻物

（１）現代に引き継がれるテロス

テロス第1の終わり

「キリスト教の完成と終末」を描くべく始まった『テロス』であるが、その「第1」を、このあたりで了とさせて頂きたい。

いま、キリスト教の補償と完成のストーリーは、ユングの登場によって、20世紀の初頭あたりまで至った。

ここから先となると、私は現代のことを描かなければならない。もっと言えば私は、現代を生きている、自分のことについて書かなければならない。

それは、書くのに、大きな覚悟を必要とすることである。また、とても、今の話の“つづき”として書ききれようような、コンパクトな話でもない。

そもそも、現代において、キリスト教の完成を宣言するためには、いくつかの「証明」を呈示する必要がある。

この疑いぶかい時代にあって、ただ声高に「今キリスト教が完成と終末を迎えた」と叫んでみたところで何の意味があるだろう。なんの意味もありはしないのだ。

そう、私が「キリスト教の完成と終末」の告知者であるならば、私には「どうして、そうだと言えるのか」という問いに答えられるだけの“根拠”を示す義務があるのである。

完成と終末の道すじ

その証明の端緒が、この『テロス第1』であることは間違いない。ここで私は、最初に「宗教の完成とは、どういう状態を言うのか」について、ごく単純で明確なイメージを示した。

それこそ「人間＝神」「神＝人間」の状態である。

そうであるならば、次に行うべきは、まず「↑」のベクトルに乗って「人間＝神」のステージに行き着くことだろう。

それが、神ならざる「人間」として生まれた私が為しうる、唯一の「宗教の完成」だからだ。

結局、この部分が明確ではないから、イエスは「人間になりきれなかった」とも言えるのだ。

むろん私は、イエスと同じことをするつもりはない。私は普通に人間の両親から生まれた者として、認識の最底辺からグノーシス（認識、靈的認識）の梯子を一段ずつ昇ってゆくつもりだ。

その梯子昇りの結果として「人間＝神」のステージに行き着くことが、第一のゴールである。

そして、このゴール地点に着いたならば、私は、そこで顔の向きを変えて、今度は「神＝人間」の方位を眺める必要があるだろう。そうすることで、私には、次に自分が行うべきことが見えてくるはずだ。

すなわち、この次には、私は「↓」のベクトルに乗って「人の子＝人の子となった神＝キリスト」である自分を示さなければならない。つまり自分のことを「再臨のキリスト」として公表するのである。

いや、公表という言葉では味気ない。キリスト教的には、これに「公現」という言葉を当てはめてこそ、しっくりくる。英語で「エピファニー」と呼ばれる慶事である。

このことが行われたとき初めて「キリスト教の完成と終末」は、本当の意味で成就する。

なぜなら「終末」と「キリストの再臨」は、キリスト教の神学にとっては、不可分のセットに他ならないからだ。かくして「テロス」は成るのである。

（２）黙示録が示すもの

七つの巻物とキリスト

『ヨハネの黙示録』の第5章に、次のような記述がある。

——またわたし〔ヨハネ〕は、〔神、すなわち天の〕王座に座っておられる方の右の手に巻物があるのを見た。表にも裏にも字が書いてあり、七つの封印で封じられていた。

また、一人の力強い天使が、
「封印を解いて、この巻物を開くのにふさわしい者はだれか」

と大声で告げるのを見た。

しかし、天にも地の下にも、この巻物を開くことのできる者、見ることの出来る者は、だれもいなかった。

この巻物を開くにも、見るにも、ふさわしい者がだれも見当たらなかったのもので、わたし〔ヨハネ〕は激しく泣いていた。

すると、長老の一人がわたしに言った。

「泣くな。見よ。ユダ族から出た獅子、ダビデのひこばえ（＝イエス・キリスト）が勝利を得たので、七つの封印を開いて、その巻物を開くことが出来る。」

（中略）子羊〔であるイエス・キリスト〕は進み出て、王座に座っておられる方の右手から、巻物を受け取った——

封印が解かれる巻物

『ヨハネの黙示録』では、この巻物の封印が順次解かれていくことが、「終末のスタート」という位置づけになっている。そして第七の封印までが解かれると、今度は七人の天使たちが七つのラッパを吹くことになる。

そしてついに「第七の天使がラッパを吹くとき、神の秘められた計画が成就する」。

——天にある神の神殿が開かれて、その神殿の中にある契約の箱が見え、稲妻、さまざまな音、雷、地震が起こり、大粒の雹が降った（第11章）——

これを「神の叡智が開示され、神と人との間に新しい契約が結ばれる」と私は解釈する。旧約、新約、そして「終約」とでも呼ぶべき、新たなテストメント（聖なる契約）が結ばれるのである。

話を戻すと、したがって、神の持ち物である七つの巻物と、その巻物の封印を解くことの出来るキリストの登場が、「キリスト教の終末」には、どうしても欠かせないことになる。『ヨハネの黙示録』の筋を辿れば、そういうことになる。

この記述を意識した訳でもないのだが、この福音書のシリーズは、7巻プラス1巻で構成されることになる。つまり「七つの封印を解いたところ、中から、七つの福音が現れた。そしてキリストが公現する」という体裁になっているのである。

「ならば、そのように封印を解くことが出来た私は、はたして再臨のキリストなのか」

という話にはなるだろう。しかし、それについては、まだ明確に答えるべきではない。むしろ、それに答えるために、まず七つの封印が解かれ、七つの福音が語られるのである。

七つの福音

福音書シリーズの構成は、以下のとおりである。

第一福音書『テロス第1』——キリスト教の完成と終末について

第二福音書『ヘルメスの杖、上』——小錬金術

第三福音書『ヘルメスの杖、下』——大錬金術

第四福音書『太陽をまとった女』——公人生の記録

第五福音書『ヘイマルメネー』——星辰的宿命と、神話の現実化

第六福音書『テロス第2』——最後の審判

第七福音書『インターレグナム』——二つの王国の媒介

第八（十七）福音書『エピファニー』——キリストの公現

各書の内容

第一福音書は、言うまでもなく本書である。

本書では、宗教の完成状態を示したあと、「未だ未完成であるキリスト教」がその状態に合致するためには、どのような補償を必要とするかを論じた。もちろん、キリスト教に足りないのは「人間の神化」「↑」の要素である。

そして錬金術こそは、西洋世界（キリスト教世界）に現れた「人間の神化」の宗教であった。だからこそ錬金術は、キリスト教によって異端とされ、忘却されてしまったのだ。

だが私は、この錬金術という宗教を現代に甦らせる。それによって明確に、キリスト教が「↑」の補償を受けることになるからである。

第二、第三福音書は、まさに錬金術の書である。そこでは「人間の神化」と「↑」のベクトルが語られ、第三福音書の最後では、ついに「人間＝神」のステージが開示される。

第四福音書は、自伝的な内容。これを読めば、私が紛れもない罪人（普通の人間）であることが、万人の目に明らかになるだろう。私は「原罪なきイエス」のように清らかな存在でもなければ、悪に無縁な存在でもないのである。

第五福音書では、いまだに完遂されていない、イエスの「神の人間化」が、私を通して完遂される。イエスは影を持ち、罪を持ち、本当の人間になる。

先行して言えば、イエスはディオニュソスと合体し、虚無と影を受け入れ、神の本当の似姿（＝人間）となるのである。

第六福音書では「人の子」の再臨宣言がなされる。つまり「神の人間化」の成就である。本書『テロス第1』の本当の結論は、ここにあると言っていい。

この『テロス第2』によって、キリスト教は真に「完成と終末」を迎えるのである。

そして第七福音書では、私にとって最大の仕事である「クリスチャンたちの“これから”を指し示すこと」が行われる。

古い時代が終わり、新しい時代が訪れる。私によって「イエスの王国」が「別のものの王国」に接ぎ木される。よって私は「つなぎの王国（インターレグナム）」である。

第八（十七）福音書というタイトルは、それを見る者に、少なからぬ違和感を与えるかもしれない。

しかし読者は、この奇妙なタイトルについて、本文のなかで、確かな納得と了解を得ることが出来るだろう。

この福音書によって、キリストの再臨は公のものとなる。すなわち再臨の奇跡は、ここで客観的な“事実”となるのである。

再臨のキリストによる福音書 1-II

著 者 正道

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
